モントリオールへの道

本誌先月号で、プレオリンピック（10月、モントリオール）の報告として書いた全日本男子・竹野奉昭監督の一文が、意外な反響を呼んでいる。

特に文面から、たくましい精神力の持ち主が必要である、といったニュアンスを強く受けとり、「今さら、そのような初歩的な問題が反省の材料としてまかり通るのか」（読者・芝端克巳さん）といった声が大きい。

ナショナルプレイヤーの必須条件は、いうまでもなく心・技・体が超一流であることであり、特に精神力は、「日本協会ナショナルプレイヤー選考基準」にも①責任感が強く根性がある②チームワークがとれる③スポーツマンシップに秀れている④勝利の執念に燃え、勝負強さ（勇気がある）を持ちあわす――と明記されている。

竹野監督の痛感する〝精神力の再養成〟とは、もちろんこうしたベーシックなものではなくもう一段階上を指すのだろうが案外、在野の目は、初歩レベルを云々して、報告を読みとったかもしれない。

それというのも、最近はナショナルプレイヤーを見る目が、ひところとは比べものにならぬほど厳しいからだ。

ナショナルプレイヤーの所属するチームの試合ぶりは、男女、学生、社会人を問わず関心が高い。とりもなおさずナショナルプレイヤーの動きが注視されるわけで、そこでファンはファンなりの評価を産む。

国内の試合でどれだけ秀れていても、対外国（特に欧州）用の選手となるとまた異なった要素が必要だ、とは、ナショナルチームの関係者がよくいう言葉で、筆者も否定はしないが、それはあくまで技・体の両面だけである。

〝心〟に関しては、国内あらゆる関係者が納得いくプレイヤーであることが必要だ。

また、ナショナルプレイヤーはナショナルチームでプレーする時にのみ冠せられる称号でないことを、再認識して欲しい。

竹野監督の一文は、同監督にしてみれば意図するものとはちがった受けとられかたをしているかも知れないが、それが〝外の目〟というものだ。

外の目は、つねに期待と希望をかけて、熱っぽく向けられているそれに応える心・技・体を改めてナショナルプレイヤーに望みたい　（杉山）

市民ハンドボールの芽

三重国体の成年女子で優勝した三重・田村紡に異色の〝応援団〟が居た。

かつて、このチームの黄金時代を築いた小林、清水、水谷、渡辺美といったOGたちが、いずれも立派なママになって愛児を引きつれ、後輩の試合ぶりを見に来ていたのだ。

彼女たちとの立ち話のなかでいちばん印象に残ったのは、現役時代の苦労ばなしでもなかったし、後輩たちへのアドバイスでもなかった。

『何か身体を動かしたい。スポーツをしたい。できるならハンドボールを、と思うのだけどチームがないし……』。

バレーや、主人に誘われたゴルフでも、と思うのだけどあまり気が進まないンですよ』

こうしたOGたちの悩みを聞くのは初めてではないが、いつも「ママさんハンドボールができるといいナ」「そうですネ」ということで終ってしまう。

この試みに何度かトライした例はあるし、大阪・豊中協会では、今でもその努力が積み重ねられていると聞くが、少くとも全国的には市民ハンドボールの他分野―例えば少年ハンドボールや、町のリーグなど―のような成果、実績をあげるまでには至っていない。

日本の家庭生活そのものの形態にも問題があり、主力選手がすべて主婦というラインハウゼン（西ドイツ＝一昨秋来日）のような姿は、ここ当分、望めそうにない。

三重国体（成年女子）には5県から、いわゆるクラブチームが出て来たが、選手の年令をみると18～20才・39人（65％）、21～22才・13人（22％）、23才以上8人（13％）となっている。

「卒業したてのイキのいい若手がいないと予選に勝てない」という事情があるにせよ、全国のOGクラブの年令層は、だいたい前記の数字が支配している感じだ。

なんとか、OGたちの〝定年〟を延ばす方法を考えなくてはいけない。少年ハンドボールにつきそってくるママたちに、ハンドボールを理解してもらうのも手かもしれない。学連や実連に、それぞれのOG大会を開くよう働きかけてみるのもいいだろう。

高校OGたちが、卒業後も、一週1回ハンドボールをしに集まるような〝習慣〟はできないものか。

スポーツ（ハンドボール）が、健康と美容に最善の手段であることをPRすれば、それに心を動かさぬ女性はいないハズだ。　（Z）

「ハンドボール」

50年12月号（第137号）目次

【表紙写真】女子高校史上初めて二度目の「完全優勝」を飾った小松市女高（石川）の攻撃。（三重国体少年女子、対愛媛戦。10月28日・四日市）

撮影・山田真市

世界女子選手権へ出発

団長に渡辺(慶)氏

日本協会は未定の第6回世界女子選手権代表団々長に渡辺慶寿常務理事（39才、日本協会技術部長日体大出、昭50世界女子選手権アジアAブロック予選監督代行）を決め、発表した。

代表チームは、三重国体直後の10月31日から11月8日まで四日市市で最終合宿、11月12日午前11時40分羽田国際空港発のソビエト航空機で、最初の遠征地・東ドイツへ向かった。

東ドイツでは第2回交流として29日まで同国ナショナル、有力クラブと親善試合（7戦の予定）を行い、そのあと世界選手権へのぞむ。帰国は12月15日羽田着の予定。



渡辺慶寿団長

東独を転戦

（速報）全日本女子は11月16日、東ドイツでSCマグデブルグと第1戦、15－20

18日、SC・ライプチヒとの第2戦は16－19と連敗。20日、ハーレとの第3戦で15－13と初白星をあげた。

第6回世界女子選手権
日本代表団

・団長　渡辺　慶寿（39才　日本協会技術部長）
・監督　井　薫（37才　立石電機監督）
・コーチ　鈴木　義男（40才　田村紡監督）
・選手

・GK	①和田　祥子	（23才	立石電機	167cm	67K）	⑮
	⑫久保　徳子	（23	田村紡	161	57　）	①
	⑯渡辺　久子	（23	日本ビクター	161	63　）	⑨
・FP	②古佐原ひろ子	（25	東京重機	153	49　）	㉔
	③島田　夏枝	（25	立石電機	163	54　）	㉔
	④蔵田　照美	（24	立石電機	163	57　）	⑯
	⑤加藤美起子	（21	日本ビクター	164	62　）	⑥
	⑥額賀美恵子	（23	日本ビクター	162	61　）	⑨
	⑦山下恵美子	（22	立石電機	160	57　）	⑯
	⑧松下　仁美	（21	田村紡	163	58　）	⑨
	⑨菊地　春美	（22	東京重機	163	64　）	⑥
	⑩河田　栄子	（20	田村紡	167	70　）	④
	⑪穂積美保子	（20	日本ビクター	168	65　）	③
	⑬紀野奈々美	（19	立石電機	165	64　）	③

・選手左側の○内数字は背番号
・右側の○内数字は公式国際試合出場数

モントリオール・男子予選

12月10日に最終決定

日本協会は11月6日、IHF（国際ハンドボール連盟）からの連絡として「モントリオールオリンピック男子アジア予選の競技法式などは、12月10日キエフ市（ソ連）で開かれるIHF理事会で最終決定されることになった」と発表した。

荒川清美理事長によれば、IHFは当初、11月上旬コペンハーゲンでの常務理事会でこの問題の結論をだす予定だった、という。

◇

IHFが11月上旬に予定どおり常務理事会を開いた結果、このような結論を導いたものなのかどうかは不明だが、日本協会は、〝一カ月の決定延期〟が、予選問題に微妙な影響を呼ぶものとみている。

というのは、日本・韓国・台湾のリーグ戦勝者－イスラエル、きらにその勝者－クウエートというIHF案が、再修正されるのではないか、という見通しがあるからだ。

日本協会自身も、本誌既報のとおり、3カ国リーグを韓国対台湾－日本に分散することを提案しているし、3カ国リーグの場合は韓国開催を望む、などの働きかけを進めている。

クウエートやイスラエル、さらに台湾なども、当然なんらかの反応を示しているものと予想され、IHFが、12月10日までに新・新案を用意するのは充分考えられる。

荒川理事長は、日本提案をいっそう強硬に要望するようだし、各国の動きも活発になるだろう。

韓国協会首脳陣が、問題収拾の話しあいのため来日を希望しているとも伝えられている。

いつまでも落ちつかぬことだが〝政治〟的な課題もからんでおり安易な姿勢で解決を急いではならない。

また、こうした機会を通して「アジアの事情」を、IHFに徹底的に理解させる努力を日本協会は怠ってはなるまい。

来年1月、AHF会議開く

クウエート協会がこのほど日本協会に寄せた連絡によると、来年1月12日から14日までクウエートで、懸案のアジア・ハンドボール連盟（AHF）会議が開かれるという。

同会議は10月18日に招集されていたが、どうやらこの時は見送られたものらしい。

来年1月の会議は、AHFの旗あげにつながるとみられ、IHFの主張する「アジア二分案」と衝突もさけられなくなる。

日本協会が、代表を派遣するかどうかは12月13日の月例常務理事会で決められる。

（注）10月18日の招集には、日本協会は出席を見合していた（＝本誌132号参照）

★ジュニアガイドブック★相談室★月例練習会………

普及活動の具体案まとまる

普及指導部

日本協会普及指導部は11月3日名古屋・ブラザー工業本社で全国委員会を開き、普及活動の具体策として、〝実〟のある結論を抽き出し11月15日の月例常務理事会で承認をうけ、実施の段取りに入った。

活動計画の主なものは①「ジュニア・ハンドボールガイドブック」の作成②クラブ問題の研究と専門委員会の設置③種別小委員会の編成④ハンドボール相談室（仮称）の開設⑤月例練習会の開催などである。

「ジュニア・ハンドボールガイドブック」は小学生を対象に内容を授業用、スクール用に分け、イラストなどを組みこんで今年度内に作りあげようというもの。

「種別小委員会」は多範にわたる普及活動を円滑に運ぶため小学部門、中学部門、高専部門、クラブ部門、研修・指導部門に分け、それぞれの抱える課題を掘り下げ解決する。

「ハンドボール相談室」は指導者の派遣、練習方法の伝授のほか新チーム発足の際にも手伝おうというもので、いわばハンドボールコンサルタントの制定だ。

「月例練習会」は、勝繁夫普及指導担当常務理事の説明によれば例えば、毎月第1土曜日、定められた時間に東京代々木のオリンピックセンター体育館へ行けば、男女年令を問わずハンドボールに親しめる会が開かれている、というもので1回の会費も百円程度というアイデア。理想を全都道府県で一斉実施においている。

出席した委員の意見が分かれたのはクラブ問題。チャンピオンスポーツとしてのものと、楽しみ本位のものとに分かれ、「クラブ」という一つの括弧でくくりにくい

このため全国のクラブ現況調査を早急に進めることとし、そのあとで、クラブ問題専門委員会をできれば年内に発足させる。

机上論から一歩踏み出し、極めて現実的な提案を打ち出した今後の普及活動に大きな期待がかけられる。

〃〃〃〃〃〃 田村会長が二つの受賞 〃〃〃〃〃〃

日本協会・田村正衛会長はこのほど永年の三重スポーツ界への尽力、貢献によって「第8回東海テレビ賞」「第11回三重県民功労章」を贈られた。

田村会長は、昭和24年から30年まで三重県体育協会副会長、31年から43年まで同会長を歴任、36年からの三重スポーツ振興審議会長は、いまも引きつづきつとめられている

「日本リーグ」新しい局面へ

日本協会の手で再検討

日本協会と全日本実連側委員の初会合（10月16日、名古屋＝本誌前号既報）によって、実現へ大きく前進したかとみえた「日本リーグ(男女)」問題は、11月15日の日本協会月例常務理事会で、一転、いっさいを振り出しへ戻し、日本協会サイドの課題として検討を加えなおす、という思わぬ方向に向けられた。

会議は、嶋田総務担当常務理事による名古屋での会合報告に対して「日本実業団リーグを日本リーグと改称するだけでは、本会の云う前向きの検討にはならない」と荒川理事長が不満の意を表明したことから1時間に及ぶ議論となった。

特に、山田常務理事（全日本実連理事長）は、①改称は7月の常務理事会に届出られ、了解されている②この問題を前向きにとらえ常務理事会で特別委の発足まで決めた――の2点から名古屋の会合の有効を強調、「改称の届出を承認したのではない。前向きとはこの機に、かねて懸案の日本リーグ問題を、考えようとしたものである」という荒川理事長の意見と〝対立〟した。

二つの云い分は平行線をたどるばかりだったが、日本リーグの開催は①競技知名度を増す②新しい競技収入源となる③都道府県協会の組織強化に役立つ④地方愛好者に好試合を提供できる⑤企業チームの増加――などから、改めて日本協会として検討することを申し合せ、「来年から実施」を目標に原案作成を総務ならびに企画委員会に一任、6月以来の「日本リーグ」問題は、ここへきて、日本協会ペースで新しい局面を迎えることになった。

嶋田常務理事は、12月13日の月例常務理事会（東京）に委員会構想を提出するといっており成りゆきが注目される。

加盟希望の公募も一案

□……荒川理事長は、かねてから日本リーグを行うなら強烈な個性新鮮な企画をともなわなければならない、といっていた。会議での発言は、その〝爆発〟であろう。

個性、企画とは実業団チーム以外の学生、教職員、クラブも含め欧州諸国の採用している全国リーグ即全国選手権を指していた。

しかし、現実は、国情も違うし東に飛び、西に移る全国リーグに加盟できるのは、実業団だけ。

全日本実連が、荒川氏の構想を判るとしながらも、理想論と片ずけ、手っとり早く日本実業団リーグを「日本リーグ」にしようとしたのは、一面、肯定される。

□……だが「日本実業団リーグ」の本体は全日本実業団選手権であり、それをまったく独立した組織(連盟)であるべき「日本リーグ」にしてしまうにはムリがあった。

6月の時点で『日本実業団リーグに参加中のチームで「日本リーグ」を新発足させる』とすれば、少くとも、今おきている混線だけはさけられたハズ。

□……ところで、〝改称〟に待ったをかけ、主導権を握りとったうえで日本協会は、この問題をどう処理するつもりだろう。

「日本リーグ」加盟希望チームを公募し、セレクショントーナメントを開くのも一案だし、これ以外に〝解決〟の方法はないというみかたも強いのだが――。（杉）

第6回 世界女子選手権を展望する

〈編集委員会〉

第6回世界女子選手権は12月2日から13日まで、ソ連のキエフ、ヴィルニウス、ロストフの3市に世界各地域の予選を勝ち抜いた12ケ国を集めて行われる。

今大会の上位4ケ国には、来年のモントリオールオリンピック出場権が与えられることになっており、熾烈な試合が連続するものと予想される。

ソ連での開催は初めてだが、7年前、すべての準備をととのえ終えた開幕直前に、ソ連戦車のチェコ侵入で中止となったいきさつがある。

日本チーム（渡辺慶寿団長ら役員3、選手14）は、東ドイツを転戦後、11月30日に第1試合地のヴィルニウス市入り。

◇　◇　◇

女子の世界選手権は昭46、48、50年と、このところ2年おきに開かれており、各国とも主力選手の入れ替えが極めてスムースに運びベテラン、若手をミックスした豊富な布陣である。

それだけに、最上位陣の実力は安定しきったものとなっており、46年の第4回大会のベストフォアは東ドイツ、ユーゴ、ハンガリー、ルーマニア、48年の第5回大会はユーゴ、ルーマニア、ソ連、ハンガリーと、わずかに東ドイツとソ連が入れ替っているにすぎない。

今回もタイトルを争うのはこれらの国々とみられ、しかも、オリンピックへのパスポート4枚をかけての激戦である。

アジア(日本)、アフリカ、アメリカ大陸諸国には、「3大陸代表(1ケ国)」という復活の道が残されているがヨーロッパ勢にとっては、オリンピック出場をかけた最後のチャンスだけに、壮烈な展開となろう。

競技は、4ケ国づつ3組の予選リーグで各組上位2ケ国（ベストシックス）が決勝リーグを争う。

また、予選各組3位によって7位〜9位決定リーグ、同4位によって10〜12位決定リーグが組まれる。

ちなみに、本大会にエントリーした国は22ケ国と史上最高だった。

日本、2勝確保めざす

日本（前回10位）は、ルーマニア（2位）、チェコ（6位）、ノルウェー（8位）らとA組に参加。ベストシックス進出には最低2勝が必要だ。

前回準優勝時の主力、アルギール、ズース、コヨカル、ペパ、GKイオネスクらが健在のルーマニアには、一歩をゆずりそうで、残る2試合がカギとなろう。

チェコとは10年前に2回対戦（8—17、5—17で2敗）しているが、東欧勢のなかではもっとも組み易い相手といえる。

初出場者9人という日本は、第1戦だけに、精神的なハンデもあるが、大会前、東ドイツ各地を転戦しているので、気遅れはあるまい。まして、東ドイツは、優勝候補の一角。それから比べればチェコは楽な相手ではなかろうか。

マティソバ、バスソバ、ダティンスカらベテランが主力で、試合かけ引きは巧いが、すご味には欠けると云われる。最近、デンマークと引き分け（12—12）た。

ノルウェー。三たび連続の対戦で、前回は9—16、前々回は12—12（引き分け）。宿敵である。

特に前回は、大会10日前のオランダ国際で14—12と勝ちながら、本番で敗れた悔しい思い出がある

ブレース、アンデルセン、アニ

出発にあたりて

団長　渡辺　慶寿

来年にせまったモントリオールに、日本ハンドボール界は「男女出場」の目標をかかげ精進している。

その第一歩としての第6回世界女子選手権。

過去における日本の成績は必しも良いものとは云えず、彼我の差を思い知らされた。今回は、オリンピック出場権がかかり、その激しさはいっそう強いものと思われる。

その壮絶な舞台へ我々が乗りこめることは満足であり、充分に力を発揮することによって、今後に示唆を与えてくれるものと思う。

勝利をおさめることが最大の目的であるが、全盛を極める東欧勢との差を縮め来年への手がかりとしたい。

監督　井　薫

韓国、台湾と初顔合せしたアジアA地域、そしてイスラエルとの〝密室〟での対戦。まさに異様な体験であったと云えます。

以来、数次の合宿を経て出発するに当たり、改めて予選—本大会への難局を切り開かれ、チャンスを与えて下さった皆様に感謝いたします。

永年の夢であったオリンピック出場につながる本大会。月並みな表現につきるが「頑張る」つもりです。ベストフォアの栄冠を目指してひしめく欧州勢に対するには、〝現有の技術の飛躍〟プラス〝強烈な気力〟以外にないと決意しております。

元気で戦ってくることをお約束いたします。

コーチ　鈴木　義男

過去5回、挑んではは ね返され、はね返されては挑んだヨーロッパの壁ですが、今回は連続出場者を中核に、勝負度胸のある若手を揃えて、上役リーグへ進出する手ごたえを感じとっています。

しかし、今回はオリンピック出場権がかかり、特にヨーロッパ勢にとっては、最後の機会だけにすさまじいばかりの気力で参加すると思われます。

幸いに、本大会前に強豪東ドイツで強化の仕上げをする機会があり、勝敗を度外視して若手の実力を存分に発揮させてみたいと計画しています。今春の予選以降、各合宿に寄せられたご支援に感謝しつつ出発いたします。

スダール、GKファウスクらがいぜん元気のようだが、問題は苦手フラセットの去就。

前回は、規定ギリギリの大会前夜エントリーされ、日本戦に出てきた。

フラセット以上の選手は各国に居るのだが、どうも相性が悪い。

少くとも今秋10月までの国際試合に、彼女の名は見えぬが、またしても突如姿を現はすか、気のもめるところだ。

しかし、日本が宿願をはたすためにはどうしてもこの2試合を落せない。確実な勝算とまではいかなくても、少くとも五分々々の力とみられ、あとは、50分間の気力の優劣であろう。

2連勝目指すユーゴ
ソ連ら3強激突のC組

B組は2連勝目指すユーゴが中心。公式国際試合出場177回の女子最高記録をもつ名GKイストバノビッチをはじめ、ルキック、トルティ、スプリノビッチ、パラベルサ、アブラモビッチ、イレースら前回の花形が残っており、ソ連国際(9月)、ユーゴ国際（10月）、デンマーク国際（11月）と前哨3大会に優勝、好調を伝えられる。

対抗するのは切り札ステルビンスキーをもつハンガリーだ。

ユーゴ国際で9—9と地元ユーゴに引き分けた自信は大きい。

デンマークにも期待はかかるが東欧強のパワーに対抗する力があるか、どうか。

ソ連国際でハンガリーを16—13で破った時のような巧さが発揮されると油断できない。

チュニジアは強化に懸命だが、西ドイツのクラブ勢と五分の勝負では苦しい。

C組は、いきなりソ連と東ドイツがぶつかり、しかもポーランドが同組。

前々回優勝の東ドイツが、前回は不覚を演じて決勝へ進めず、そのため、このような組み合せになった。

前回3位のソ連はツルシナ、マカレスの両エースを看板に、地元優勝を狙っており、そのためにはどうしても緒戦は落とせない。

東ドイツも、ここで1勝するかしないかは、モントリオール行に響いてくる。

カルパティア・カップ(8月)では22—11と大勝したが、ソ連国際では15—15。

ポーランドはクルジコースカ、シレヴィッツ、コストースカら前回(5位)の若手が主力となり、波にのると手がつけられない。

アメリカは、プレオリンピック(9月、モントリオール)で観た全日本男子選手によると、大柄で想像以上の戦力というが、東欧勢の一角にはとうてい切りこめまい。

なお、アメリカとチュニジアは11月中旬からルーマニアで強化合宿を行っている。

「モントリオール」かけ白熱

さてベストシックスの顔ぶれだが、ルーマニア、ユーゴ、ハンガリーはまず確実。C組の2国（ソ連と東ドイツか）、A組の残り1ケ国はおいそれと予想できない。

特にA組は日本かチェコかノルウェーか。神のみぞ知る、であろう予選リーグの勝敗は例によって決勝リーグに持ちこまれるから、この時点で1勝の持ち点が予想できるルーマニア、ユーゴそれにC組1位国が、栄冠に最短距離となる。

前哨各大会を眺めてみると、ユーゴが比較的安定しているようだが、その他の国はもう一つまとまりがない。

順位はめまぐるしく動いており、ルーマニアでさえ、Bクラスの西ドイツに1勝1敗（16—12、8—10）という最新情報もある。

6強による4連戦（7〜13日）は史上まれにみる激戦だ。

この間にはさまって、日本が一気にオリンピック出場権を手にするためには技術・戦術・体力・気力のすべてが、最高度に発揮されなければならない。

井監督らコーチングスタッフは前回の大会終了直後から、今大会への構想を築きあげてきた。

島田(立石電機)、古佐原（東京重機）が初の3回出場をはたすほか山下、蔵田、GK和田（いずれも立石電機）ら攻守の要が2回目の出場と主戦力のキャリアに不安はない。

密室試合までして手に入れた出場権。日本がベストフォアに進めば、アジアからもう一ケ国、モントリオール行きのチャンスが生まれてくる。東ドイツ転戦で失点の多いのが気にはなるが朗報を期待したい。

第6回世界女子選手権

◇……予選リーグ……◇

▽第1日（12月2日）
19：00 A ルーマニア×ノルウェー（W）
B ユーゴ×デンマーク（L）
C ソ連×東ドイツ
20：15 A 日本×チェコ（W）
B ハンガリー×チュニジア（L）
C ポーランド×アメリカ

▽第2日（12月3日）
18：30 A チェコ×ノルウェー（W）
B ハンガリー×デンマーク（L）
C 東ドイツ×ポーランド
19：45 A 日本×ルーマニア（W）
B ユーゴ×チュニジア（L）
C ソ連×アメリカ

▽第3日（12月5日）
17：00 A ルーマニア×チェコ（W）
B ハンガリー×ユーゴ（L）
C ポーランド×ソ連
18：15 A 日本×ノルウェー（W）
B チュニジア×デンマーク（L）
C アメリカ×東ドイツ

（ ）内Wはヴィルニウス市
Lはロストフ市
その他はいずれもキエフ市

◇……決勝リーグ(キエフ市)……◇

▽第4日（12月7日）
16：00 B組①×A組②
17：15 A組①×C組②
18：30 C組①×B組②

▽第6日（12月9日）
17：00 A組①×B組②
18：15 A組②×C組②
19：30 B組①×C組①

▽第7日（12月11日）
17：00 A組②×B組②
18：15 A組①×C組①
19：30 B組①×C組②

▽第8日（12月13日）＝最終日
12：00 B組②×C組②
13：15 C組①×A組②
14：30 A組①×B組①

◇…7〜9位決定リーグ(ヴィルニウス市)…◇

▽第4日（12月7日）
15：15 A組③×C組③

▽第5日（12月8日）
17：15 B組③×C組③

▽第6日（12月9日）
13：15 A組③×B組③

◇…10〜12位決定リーグ(ヴィルニウス市)◇

▽第4日（12月7日）
16：00 A組④×C組④

▽第5日（12月8日）
16：00 B組④×C組④

▽第6日（12月9日）
12：00 A組④×B組④

☆★☆海外トピックス

杉山　茂（NHK運動部）

世界選抜、地力示す

ヨーロッパハンドボール界のメッカともいうべき西ドイツ・ドルトムントの大体育館ウエストハーレンホールの設立50周年を記念するIHFオールスターズ（世界選抜）×西ドイツナショナルの試合は、11月2日午後6時から同ホールに三千五百人の観衆を集めて行われ、智将I・クンスト（ルーマニア）が卒いるスターズが後半地力を示し、順当勝ちした。

IHF（国際ハンドボール連盟）が、ワールドオールスターズを編成するのは史上3度目。

14人のスーパースターたちは、ホームチームの特色を抽きだしながら、随所に世界最高の技と力で見せ場をつくる。

日本のファンにとっては〝垂涎の催し〟と云えるが、今回はどうしたわけか、もう一つ盛りあがらず、一万三千人近くを収容できる大ホールに三分の一程度のファンが集っただけだった。

モントリオールを目指す西ドイツは精いっぱいの健斗を示したようだが、やはり決定的な力に欠けスターズの一員として要所で得点ファンを熱狂させたシュミット（グンメルスバッハ）のカムバックを望む声が、またチラホラ出ているらしい。

IHFオールスターズ 25（13－9、12－12）21 西ドイツ

得	【世界選抜】		【西ドイツ】	得
0	カーター（西ドイツ）	GK	ヤシック	0
0	ペヌ（ルーマニア）	GK	ラウエル	0
0	アルスラナジッチ（ユーゴ）	GK		
1	ボック（デンマーク）	FP	スペングラー	1
0	ハンセン（デンマーク）	FP	デッカーム	6
3	ポクラヤク（ユーゴ）	FP	H・ブラント	2
6	ポポビッチ（ユーゴ）	FP	クリュスパイス	1
2	ホルバット（ユーゴ）	FP	ハーン	3
1	ガツ（ルーマニア）	FP	ピッケル	0
1	リク（ルーマニア）	FP	ブッシュ	5
1	キクシド（ルーマニア）	FP	フィッシャー	0
6	バルガ（ハンガリー）	FP	ベッカー	3
3	シュミット（西ドイツ）	FP	ボッシェル	0
1	フェルトホフ（西ドイツ）	FP	エーレット	0
		FP	ボクゾコウスキー	0
		FP	ベックリング	0
25	（4）	PT	（1）	21

＜注＞スターズの一員にリストアップされていた日本の佐藤要二選手（FP、本田技研鈴鹿）は、三重国体と重なったため不参加。

ユーゴ全勝は逃す

～ユーゴ女子国際～

第15回ユーゴトロフィ国際女子トーナメントは10月中旬、世界選手権の有力優勝候補4ケ国を集めて行われた。

連日三千をこすファンを熱狂させる接戦がつづき、地元ユーゴが順当に勝ち進み、完勝かとみえたが最終戦でハンガリーに粘られ引き分け、全勝優勝はならなかった。

個人最高得点は16ゴールをあげたステルンビンスキー（ハンガリー）。

ハンガリー 15（6－2、8－12）14 ポーランド

ユーゴ 13（6－6、7－3）9 ソ連

ソ連 18（8－5、10－10）15 ハンガリー

ユーゴ 21（11－8、10－5）13 ポーランド

ポーランド 14（11－9、3－4）13 ソ連

ユーゴ 9（4－3、5－6）9 ハンガリー（引き分け）

【順位】①ユーゴ2勝1分②ハンガリー1勝1分③ソ連・ポーランド

ユーゴ、順調な仕上り

地元での優勝を飾ったユーゴは11月7日からリンコビングなどで開かれたデンマーク女子国際でも好内容で勝ち進み、世界選手権目指して順調な仕上りを示した。

デンマーク 11（5－5、6－3）8 西ドイツ

ユーゴ 16（8－9、8－6）15 チェコ

チェコ 14（7－5、7－5）10 西ドイツ

ユーゴ 17（9－7、8－5）12 デンマーク

ユーゴ 13（5－9、8－3）12 西ドイツ

デンマーク 12（6－6、6－6）12 チェコ

【順位】①ユーゴ3戦全勝②チェコ・デンマーク1勝1分1敗③西ドイツ3敗

3国対抗でハンガリー

ブダペスト国際女子は、3国対抗の形式で行われ、ハンガリーが順当勝ち。日本の宿敵ノルウェーはポーランドと引き分けた。

ハンガリー 18－13 ノルウェー

ポーランド 13－13 ノルウェー

ハンガリー 16－12 ポーランド

西ドイツ、復調示す

～オーストリア男子国際～

オーストリア協会恒例の4ケ国対抗は10月17日から19日ウィーンで行われ、ハンガリーが西ドイツを得失点差でかわし優勝した。

思い切った若手登用をみせる西ドイツが、復調を示しているのが注目される。

ハンガリー 26－12 オランダ

西ドイツ 15－13 オーストリア

西ドイツ 18－10 オランダ

ハンガリー 28－18 オーストリア

オーストリア 15（分）15 オランダ

ハンガリー 18（11－10、7－8）18 西ドイツ

【順位】①ハンガリー2勝1分（得失点差24）②西ドイツ2勝1分（10）③オーストリア・オランダ

オーストリア国際で優勝のハンガリーは引きつづきチューリッヒのスイス国際に出場、スウェーデン、スイスを制して優勝、いわゆるヨーロッパ中堅層ではいぜん地力のあるところを示した。なお、ハンガリー×スイスはオリンピック欧州地域予選の第3群で同組。

スウェーデン 15－13 スイス

ハンガリー 27－7 スイスB

スイス 22－14 スイスB

ハンガリー 28（16－8、12－6）14 スウェーデン

ハンガリー 18－16 スイス

スウェーデン 25－8 スイスB

【順位】①ハンガリー3戦全勝②スウェーデン2勝1敗③スイス1勝2敗④スイスB3敗

欧州杯　女子も強豪不参加

男子第16回、女子第15回ヨーロッパカップは、10月14日に幕をあけたが、本誌既報のとおり男子に東欧の強豪が不参加を表明したのにつづき、女子も前回優勝のスパルタク・キエフ（ソ連）をはじめ東ドイツ、ルーマニア、ハンガリーなどが代表を送らず、結局13ケ国がエントリーしたにとどまった。

男女とも東欧勢の欠場の理由は「オリンピック、世界選手権に全力を注ぐため」とのみ伝えられている。

オリンピック欧州予選火ぶた

来年のモントリオール・オリンピックを目指す男子ヨーロッパ予選が、11月3日プラハのチェコ×イタリア戦で火ぶたを切った。

ヨーロッパ予選にエントリーしたのは21ケ国。3ケ国づつ7組に分かれて各2回総当り、来年3月はじめ、各組勝者(7ケ国)が代表権を握る。

第1節は11月3日から7日まで各地で7試合が行われ、代表候補が順当勝ち、なかでもミュンヘンオリンピック優勝のユーゴは、ルクセンブルグから54点を奪う圧勝で、幸先よいスタート。ポーランドも初登場のイギリスに大勝した。

第2節は、本誌前号既報のとおり、11月24日から30日まで各地で行われるが、スイス×ブルガリア(第3群)、オーストリアフランス(第4群)、スペイン×オランダ(第7群)などの好カードがある。

なお、昨年の世界選手権で優勝したルーマニアにはすでにオリンピック出場権が与えられている。

▽第1群
ユーゴ(1勝) 54（27—8、27—5）13 ルクセンブルグ(1敗)

▽第2群
チェコ(1勝) 29（18—6、11—4）10 イタリア(1敗)

▽第3群
ハンガリー(1勝) 24（13—8、11—7）15 スイス(1敗)

▽第4群
ソ連(1勝) 36（20—8、16—5）13 オーストリア(1敗)

▽第5群
東ドイツ(1勝) 27（17—6、10—5）11 ベルギー(1敗)

▽第6群
ポーランド(1勝) 42（20—5、22—0）5 イギリス(1敗)

▽第7群
デンマーク(1勝) 24（13—8、11—6）14 オランダ(1敗)

注目の東西ドイツ戦　第3節

ところで12月のヨーロッパ予選は、世界女子との関連からか、各群とも1カードだけ。

しかし、強国同士の顔合せが並び、持に12月20日ミュンヘンの大体育館で行われる西ドイツ×東ドイツ戦は、エキサイトした試合になりそう。なお、アメリカ大陸予選アメリカ×アルゼンチン戦は1月3、10日に行われる模様

欧州予選12月の日程

▽第3節（12月15～21日）
- アイスランド×ユーゴ　（第1群）
- スウェーデン×チェコ　（第2群）
- ブルガリア×ハンガリー（第3群）
- フランス×ソ　連　（第4群）
- 西ドイツ×東ドイツ　（第5群）
- ノルウェー×ポーランド（第6群）
- スペイン×デンマーク　（第7群）

（注）いずれも1回戦。左側がホームチーム

全日本総合選手権（10日～14日 東京体育館）

3冠かける大同製鋼，田村紡

女子…主力残留のブラザー有望

日本リーグ開催が取り沙汰されるなかで、今シーズンの総決算、ナショナルチャンピオンチームの栄誉をかけた第27回全日本総合選手権が12月10日から14日まで東京体育館で行われる。（9日・開会式）参加チームは例年どおり男子16、女子12。

女子は主力選手が世界選手権（12月2～14日・キエフ）に出場のため留守にするが、男子は全日本選手（オリンピック候補）がほとんど顔を揃えそのプレーにも注目が集まる優勝の行方を探ってみよう

立ちはだかる湧永、本田ら

◇男子（16チームが4組の予選トーナメント、各組1位で決勝リーグ）

焦点はなんといっても大同製鋼（愛知）の3年連続3冠王なるかだ。すでに全日本実業団（日本実業団リーグ、6月）、国体（10月）のタイトルを手中におさめ、この大会が総決算である。

追われる立ち場にありながら、ビッグカードほど本領を発揮する試合ぶりは心にくいばかり。

国内最高プレイヤーの名を今や不動にしている藤中をはじめ、中井、花輪、松原、柳川弟と5人の全日本選手を並べ、攻守ともにまったく不安がない。

しかもベテラン野田、GK柳川兄、若手の大原（京都産大出）、北村らが元気で層の厚さも随一。

各チーム「打倒大同」に斗志

決勝リーグの相手は、ライバル湧永薬品（大阪）、中大（東京）、本田技研鈴鹿（三重）とみる声が強い。チーム側も自信にあふれ、しかも「打倒大同」が目標と口を揃える。

湧永は、穂積（全日本）のめざましい進境で破壊力が増し、津川（全日本）の動きもいい。

円熟した木野（全日本）、戸田、高橋、新人・松本（中大出）、GK福井らで、大同に遜色はない。実業団の時は、木野が負傷で欠け13－17。国体で本田に逆転負けした〝後遺症〟がなければ、大同を倒す一番手である。

中大は、波があり安定感という点で心配もあるが、溌らつとした攻守は学生界の王者にふさわしい。

看板は蒲生（全日本）のパワーと大熊、金沢、西窪、関、戸田らのスピード豊かなテクニカルプレーだ。GK田村も手固い。

昨年、ベストフォアを前に全滅した学生勢の巻き返しなるか、の点でも注目される。

いちだんとすご味を加えてきた佐藤（全日本）を切り札に、柳、長谷川、新実、田上、新人・喜井（日体大出）らの充実で、本田技研がいよいよ王座へ手のとどくところまでチーム力を引きあげてきたのも見どころの一つ。

ここの課題はFPの守備力だ。GK細野が一流だけに、もう少し粘りをみせれば傷口がふさがる。

東海選手権（9月）では大同を13－12、国体（10月）では湧永を12－11で降し絶好調といってよい。

波乱の目に三景、イーグルス

この4強にも死角はある。特に湧永にはGK本田（全日本）をもつ大阪イーグルス、中大には試合運びの巧いベテランを揃えた大崎電気（埼玉）、本田には前回2位の面目にかけても一暴れしたい三景（東京）と、手強い相手が立ちはだかっている。

大同も一本調子ながら波にのれば一気にかけあがりそうな日体大（東京）と緒戦で顔を合わす。油断はできない。

特に、巧者揃いの三景と大阪イーグルスはせりあいの強さ、ここ一番でのたくましさを誇り、波乱の目といってよい。

本田技研の1回戦に東京代表（都協会推）が当たったのは面白い。

早大、法大、東京教員あたりが有力と云われるが、どこが出ても攻守の要がしっかりしているだけにもつれる公算は充分。

このほか、上り坂の大阪体大、近森が陣頭指揮する三陽商会（東京）も無気味な存在。初出場の大体大出を主軸とした大阪教員クもこれまでの努力を開花させる。

海上下総（千葉）は、やや線が細いが、自衛隊球界も推せん制を受けて5年目。そろそろ1勝が欲しいところだ。

クラブ勢は、東西とも予選会（代表決定戦）が遅れているが、この大会を目指して意欲的な活動を続けているだけに善戦が望める。

さしずめ、1回戦の大阪イーグルス×社会人東地区代表（北海道函館有斗ク×神奈川・三春台クの勝者）は〝クラブ日本一争い〟。

高校チャンピオン・清水（千葉）は、湧永相手とは不運なクジ。

しかし「またとないチャンス」とばかり、夏にも優る元気さと伝えられているだけに見守りたい。【杉山　茂】

主力が遠征、混戦か

◇女子（12チームが3組の予選トーナメント、各組1位で決勝リーグ、同2位で4位決定リーグ）

立石電機（熊本）の5人をはじめ前年のクイーン・東京重機（東京）3冠を狙う田村紡(三重)、日本ビクター（茨城）から主力が世界選手権のため脱けている。

重機はスタートメンバーを確保するのがやっと、田村紡も偉業を前に攻守の柱を欠いたのは痛い。

反面、各チームに優勝のチャンスが生まれたとも云えるし、オリンピック候補（注・全日本女子は1月以降この名称を兼ねる予定）に追加されるような新星がとび出してくるか、の楽しみもある。

それらを考慮にいれて展望してみたい。

常識的には、国体決勝で田村紡に1点差まで詰め寄ったブラザー工業（愛知）が不動のメンバーが揃っているばかりでなく、実力もともなってきており優勝候補ナンバーワンだろう。原川をリーダーに小森(全日本)、宮平、中川、GK井戸田らの布陣は強力である。

2連勝を狙う東京重機は、全日本実業団（6月）ではGK三紙が負傷欠場して不本位な成績におわったが、今回もチームの要である古佐原、菊地がいないため、かなり苦しい展開になりそうである。折口、村上らで持ち前のスピードある動きでゲームを運べるかがカギになる。

Bグループは順当ならば日本ビクター（茨城）だが、額賀ら4人がぬける戦力低下を、ベテラン池田がどうまとめるか興味深い。

もしビクター以外というなら、ブラザー同様メンバーの揃っている大崎電気(埼玉)をあげたい。このところあまり目立った成績をあげていないだけに、左腕大場（全日本）らを中心に一矢をむくいたいところである。

今季、実業団、国体と好調に勝ちつづけてきた田村紡は42年度につづく2度目の三冠王を狙いたいが、国体決勝戦でひとり7得点をあげた大砲松下、守りの要・久保がいないのは痛い。

しかし、三毛のリード、和久井横山らの攻守は定評があるので、若手がついていければ優勝も夢ではないのではないか。

田村紡と同じCグループで最近力の安定している立石電機は、主力遠征の穴があまりにも大きく加子崎、ホープ池渕らでどこまで補え切るか。条件としてはかなり難しいように思う。

毎年実業団の力に押され気味の学生勢。いささか「鬼のいぬまに…」の感はあるが挽回のチャンスである。

特に、関東学生秋季、全日本学生と勢いづいている東女体大（東京）は赤岸、高橋、三沢、西峰らで是非とも実業団の壁を破ってほしい。

名門・日体(東京)はエース藤山の負傷が長びいているが林、小田寺尾淳らで充分上位を狙える。

小松市立女高(石川)はいきなりブラザー工業とは気の毒だが、インターハイ、国体と連覇、史上初の2度目の完全優勝をはたし高校界では抜群の強さを誇っているだけに若々しいプレーを期待したい。

クラブチームでは去年、一昨年と高校で大活躍した伊藤を中心としてまとまっている徳山クが油断できない。また。次期国体開催地佐賀県一般女子は神埼農高OGを中心に若手で固め、練習量も多いようなので、きっかけがつかめればおもしろい。

主力不在による実力接近で予断を許さぬ妙味が生まれただけに、あとは内容の充実した好試合を望みたい。【青木敬子】

全日本総組み合せと日程

○……予選ラウンド……○

第1日(10日)10.30～19.10

第2日(11日)10.30～19.10

【男子】

- 湧永薬品（実　連）
- 清水高（高体連）
- 11月26日に発表（社会人東）
- 大阪イーグルス（教職員連）
- 大崎電気（実　連）
- 海上下総（自衛隊連）
- 11月29日に決定（社会人西）
- 中大（学　連）
- 本田技研鈴鹿（実　連）
- 11月29日に発表（東京協推）
- 大阪体大（学　連）
- 三景（日本協推）
- 三陽商会（実　連）
- 大阪教員ク（教職員連）
- 日体大（学　連）
- 大同製鋼（日本協推）

【女子】

- 東京重機（日本協推）
- 佐賀ク（次回国体）
- ブラザー工業（実　連）
- 小松市女高（高体連）
- 日本ビクター（実　連）
- 日体大（学　連）
- 徳山ク（社会人）
- 大崎電気（実　連）
- 田村紡（日本協推）
- 11月29日に発表（東京協推）
- 立石電機（実　連）
- 東京女体大（学　連）

○……決勝リーグ及び女子4位決定リーグ……○

第3日（12日）	15.00	女子④
	16.10	女子決
	17.20	男子決
	18.40	男子決
第4日（13日）	15.00	女子④
	16.10	女子決
	17.20	男子決
	18.40	男子決
最終日（14日）	12.00	女子④
	13.20	女子決
	14.30	男子決
	15.45	男子決

（NHK・TV14日15.40～17.00）

「日本協会公認審判員規定」の一部変更決まる

日本協会は、「日本協会公認審判員規定」の一部変更について、全国代議員会及び全国理事会へ文書による諾否を求めていたが、このほどまとまり、全国代議員会は52代議員のうち、36名の同意（反対3、未回答13）、全国理事会は29理事のうち、24名の同意（反対0、未回答5）を得たと発表した。

この結果、11月15日付で施行を決めるとともに、今年度に限り「規程9」に示された期限を12月31日までとした。

変更条文を含む「日本協会公認審判員規定」は次の通り。

日本協会公認審判員規定

（◎印・変更条文）

規定1（審判員の級）公認審判員は、審判技術によってA・B・C・Dの4つの級に分ける。

規定2（審判員の資格取得年令）公認審判員の資格はD級から与えられる。ただし申請の資格は満20才以上とする。

規程3（D級の申請）D級を申請する場合には、ハンドボール競技公認審判員申請書（所定の様式）に審査料300円をそえて、各都道府県協会審判部に申請する。

◎規程4（D級の審査と認定）D級の審査は各都道府県協会審判部において行ない、認定者を毎年3月31日までに日本協会審判部に認定料500円およびコイン・審判手帳胸マーク代千五百円をそえて報告し、登録される。

規程5（D級の資格と登録）D級認定後、日本協会から公認審判員手帳・胸マーク・コインが与えられることによって資格を取得し、日本協会公認審判員として登録される。

規程6（上級申請の要件）上級を申請する場合には、次の要件が満たされていなければならない。

イ、C級を申請する場合には、D級を取得してから満1年を経ていなければならない。

ロ、B級を申請する場合には、C級を取得してから満2年を経ていなければならない。C級を取得してから30試合以上の審判をしていること。

ハ、A級を申請する場合には、B級を取得してから満2年を経ていなければならない。B級を取得してから50試合以上の審判をしていること。

ニ、各級審判員は年1回講習会あるいは研修会に出席していなければならない。

規程7（C級の申請）C級を申請する場合には、ハンドボール競技公認審判員申請書（所定の様式）に審査料500円をそえて、各ブロック審判部に申請する。

◎規程8（C級の審査と登録）C級の審査は各ブロック審判部において行ない、認定者を毎年3月31日までに日本協会審判部に認定料千円をそえて報告し、登録される。

◎規程9（A級・B級の申請）A級、B級を申請する場合には、ハンドボール競技公認審判員申請書（所定の様式）に、ブロック審判部長の推薦書、審判手帳、審査料千円をそえてブロック審判部を経て、日本協会審判部に申請する。

申請の期間は毎年11月1日から11月30日までとする。

規程10（A級・B級の審査）A級・B級の審査は、日本協会審判部が定める会場において、書類、実技、ペーパーテストによって行なう。

◎規程11（認定料）各級公認審判員に認定された場合には、下記の認定料を日本協会に納入しなければならない。

D級認定料　500円。C級認定料千円。B級認定料　千五百円。A級認定料、二千円。

◎規程12（審査の回数）各級とも審査は年1回とする。

規程13（手帳の検査）公認審判員手帳は、指定された期日までに日本協会審判部に提出し、検印を受けなければならない（提出の方法は、各都道府県協会で一括し、提出者の名簿を添付すること。）

規程14（審判員の登録）A級・B級・C級の各級公認審判員は下記によって登録を行なわなければならない。

1、登録の期間、毎奇数年度の5月1日から5月31日までの期間

2、登録料　A級およびB級500円。C級　300円。

3、登録の手続き　各都道府県ごとに一括し、登録者の名簿（所定の様式）2部を作成し、登録料をそえて、日本協会審判部に提出する。日本協会審判部は、必要な手続きのあと、名簿1部と登録済証を返送する。登録済証は手帳に貼付する。

4、資格の消滅、登録を行なわない場合には、公認審判員の資格を失なう。

規程15（講習会・研修会）各級公認審判員は、日本協会または各都道府県協会が開催する審判講習会研修会に出席しなければならない

規程16（各級審判員の大会管理の資格）各級公認審判員は、次の大会を管理することができる。

A級　国際競技を含むすべての大会。　B級　ブロック大会。

C級　各都道府県大会。

規程17（各級審判員の資格）各級公認審判員は次の大会の審判をすることができる。

A級　国際競技を含むすべての競技。B級　国際競技以外のすべての競技。C級　ブロック大会・各都道府県大会の競技。D級　各都道府県大会の競技、

規程18（全日本大会審判員）全日本大会の審判員として参加する場合には、日本協会が開催する全日本大会審判員研修会に出席していなければならない。

各全日本大会の審判員は、大会前日に開催される研修会に必ず出席しなければならない。

規程19（審判着）A級・B級の公認審判員は、日本協会が制定した審判着を着用しなければならない

規程20（資格の審査）次の項に該当する場合、公認審判員としての資格を審査される。

イ、満2年以上審判から遠ざかった場合　ロ、日本協会アマチュア規定に反したり懲罰規定にふれる行為のあった場合　ハ、公認審判員としてふさわしくない言動のあった場合　ニ、審判講習会・研修会などに無届で欠席した場合　ホ、指定の期日までに公認審判員手帳を提出しなかった場合（更新など）　※　A級については、規程20―イに関しては別に審査する

規程21（変更）公認審判員手帳の記載事項に変更があった場合には日本協会審判部に連絡しなければならない。

ＩＨＦ審判講習会 報告３

～Ｊ・Ｐ・ラコー氏の講演～

安藤　純光
岡前　義春

ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）の「ルールとレフェリーの委員会」（ＲＳＫ）は、Ｅ・ホルレ委員長（ソ連）をはじめ、Ｊ・グリーンベルガス（ソ連）、Ｃ・バング（ノルウェー）、Ｊ・Ｐラコー（フランス）の各氏がメンバー。

今回はその一人ラコー氏（J.P. Lacoux）の講演を報告する。

ここでおことわりしておくが、前号の〈報告2〉を競技規則書と照合の上読まれたかたは、すでに気づかれたことと思うが、現行の日本協会発行の「50年度版競技規則書」と講演の内容に多少の差異がある。

これはＩＨＦが一九七五年版を発行し、これに基いての講演であり、日本協会発行の「50年度版」は一九七三年版を基礎にしているためである。

〔Ｊ・Ｐ・ラコー氏の講演〕

一九七四年ＩＨＦ総会（ジエスロ）に基づく新しいルール変更

一九七四年マクリンゲンにおけるＩＨＦのシンポジュウムには、各国のコーチとレフェリー主任たちが参加した。

このシンポジュウムでは提出されたルール改正についての一般的論議をすることができた。

しかし、各国チームは、オリンピックを前にして準備の真最中であるので、オリンピック前にはルール改正は行なわない。というのがＩＨＦ総会の決議であった。

ＲＳＫは、この総会の決議を尊重して、構造上の改正と編集上の改正とを別々にすることを試み、ルール――構造――提案は、一九七六年のオリンピック後に新たに論議しようとしたのである。

先ほど（前号）、ホルレ委員長はプレイの考えかたには全く影響のない編集上の諸改正を発表した。

そこでＲＳＫは、四つの構造上のルール改正の討議を提案するものである。

このことは、すでにマクリンゲン及びジェスロに於いて論議されたものである。

それはルールの１：７、３：７、17：13、17：14に関するものだ。

この順を追って、これらのルールについて述べてみたい。

〔１：７〕

センターラインからそれぞれ３ｍの間隔で競技場に長さ15㎝の２本の平行なラインを引く。このラインは交替圏を限るものである。（図１と３）

ところでプレイ中に何が起こるか？

タイムキーパーとスコアラーの義務を実行することは容易でないことがしばしばある。何となれば彼の目の前にはチームのコーチと共に交替するプレイヤーと競技を出るプレイヤーが視野をさえぎるからである。

それ故に３ｍの交替ゾーンを両側へ向ってそれぞれ一・五〇ｍづつ拡げることを考慮する必要がある。こうすることによってセンターラインからそれぞれ四・五〇ｍの交替ゾーンが生れることになる。

この距離は、タイムキーパーが交替をかなりはなれたところから監視しなければならないような場合を含めて、交替の際によりよい秩序を保証してくれるように思われる。

〔３：７〕

ここにはルールに反する交替に対する罰則が述べられている。分析を簡単にするために攻撃側プレイヤーの違反と防禦側プレイヤーの違反とを区別している。

攻撃側プレイヤーの誤った交替は、現行のルールにおいては次のように罰しうることになっている

ａ　一回目は、フリースロー
ｂ　二回目は、フリースローと二分間の退場
ｃ　三回目およびそれ以上はすべて、フリースローと五分間の退場

これらの退場は特別な性質のものである。というのは、これらの退場は３回くりかえすと失格するという正規の退場の中へ組み入れられないからである。

例えば、１人のプレイヤーは失格させられる前に４ないし５回の退場をもちうるし、また、ルールに違反した交替に対しても同じ退場を適用できる。

それ故に退場については、ただ一種類にする（１つの範疇）ことが望ましいように思われる。もしこうすればレフェリーにとっては管理がしやすくなるであろう。レフェリーは２つの系列の退場を行なう必要がなくなるであろうからである。

攻撃側のルールに違反した交替に対しては、そのチームはただフリースローだけで罰するようにするのが当を得たもののように思われる。交替の誤りを少なくするためには、この措置で充分であろう

しかしながら、あるチームが紀律が悪くルールに反する交替を何回もくりかえすようなときには、この行為は故意にくりかえされた違反として警告と退場で罰せられなければならない。その場合３回目の退場は必ず５分間とし、そのプレイヤは即時失格にすべきである。

３：７の条文を次のようなものにしてはどうであろうか、提案する。

「ボールをもっているチームのルールに反する交替は、直ちに違反を犯かしたプレイヤーがサイドラインを越えたところからのフリースローをもって罰せられなければならない（17：14、16参照）」

註：これらは現行の17：13のくりかえされたルール違反に対するルールである。しかし次の提案においては17：13は17：14になる。

ボールをもたないチームの誤まった交替

この行動に関する３：７のルールは変らない。すなわちボールをもっていないチームの誤まった交替は、それによってプレイに影響がある場合にのみ罰せられるべきである（17：14、16を参照）。

これに反して誤まった交替の際に、明らかな得点のチャンスが阻害された場合には、誤まちをおか

したチームは、ペナルティースローで罰せられるべきであり、また誤まちをおかしたそのプレイヤーは失格させられなければならない

しかしながら、このような極端な場合が起る前にプレイに影響のない交替の誤まちを何回もおかすことがありうる。レフェリーは、この場合にはくりかえされたルール違反に対して17：14を適用しなければならないし、そのプレイヤーを警告し場合によってはそのプレイヤーを排除しなければならない。

RSKはこのことに関して14：8の原注に諸氏の注目を向けたい

これについて適切な例がある。

1人のプレイヤーがボールをもった反撃にスタートする。彼の後には味方のプレイヤーがフォローしている。防禦側は防禦する可能性がなく打撃（失点）を受けたと思う。そのとき一人の交替プレイヤーが、他のプレイヤーが競技場を出ないうちに競技場へおどり込む。誤まって中へ入ったプレイヤーは、ボールをもっているプレイヤーに向って立つ。しかしこの（ボールをもった）プレイヤーは、味方のプレイヤーへのパスに成功する。

この瞬間にレフェリーは直ちに笛を吹いてはならないことは明らかである。レフェリーは、罰を延期して腕（片方の）を何回も上にあげて合図し、そして後で罰する

ボールをもっていないチームを直ちに罰してはならないようなルールに反する交替の、その他の例を挙げることを私は諸氏におまかせする。そのチーム（ボールをもたない）が得点のチャンスを妨げることがありうる場合をも含めてボールをもたないチームの誤まった交替は、それによってプレイが影響された場合にのみ罰すべきである。

誤まった交替によって明らかな得点のチャンスが阻害されたときには、誤まちをおかしたチームはペナルティースローで罰せられなければならない。そして誤ちをおかしたプレイヤーは、失格させられなければならない（17：20）（14：8の原注参照）。

次のルール違反は区別されなければならない。

a　粗暴なプレイ（17：13）

b　非スポーツ的な行動およびルール違反（17：14）

レフェリーは、これらの反則をより少なく制限することができるハンドボールにとって重要な課題は、粗暴なプレイを無くすることである。

【17：14】

「非スポーツ的な行動および故意にくりかえされたルール違反があった場合には、レフェリーフリースローあるいはペナルティースローの決定を下し、また誤まちをおかしたプレイヤーに同時に警告もしなければならない。

くりかえされた場合には、競技場にいるそのプレイヤーを退場（17：16）。あるいは追放（17：18）しなければならない。

レフェリーは同じように、一人のプレイヤーまたはベンチあるいは交替エリアにいるチームの役員に警告し、くりかえして行なわれたならば失格させる権利をもっている（17：20）。

プレイの流れを阻止する重大な違反、すなわち非スポーツ的な行為があった場合には、警告をしていなくても退場（17：16）。追放（17：18）または失格（17：20）させることができる。

プレイが中断している間に非スポーツ的な行為があった場合にはその中断の原因にふさわしいスローでプレイを再開すべきである。」

競技場におけるスポーツ的な行為を保証することは絶対に必要である。

われわれは、不都合な認めることのできない行動をするすべてのプレイヤーに対して、これに反対する行動をとらなければならないこれについて2、3の例をあげておく。

――相手に対して礼を失した言葉および行為。相手を妨げるルール違反。これには、非スポーツ的なものと悪意のないものも、またくりかえされた違反、故意のものあるいは故意でないものも含まれる――。

すなわち、誤まった交替、相手の反撃を阻止するためにゴールエリアへ侵入すること、フリースローのとき3mの間隔を守らない、

非スポーツ的行為が、相手を妨げたり、プレイの正常な流れを妨げたりするほどにおよんだときには、レフェリーは事前に警告をしていなくともその誤まりをおかしたプレイヤーを退場または退放をもって罰しなければならない。

例：フリースローで罰せられたチームのボールをもっているプレイヤーが、ボールをもち去ったりあるいは相手が直ちにプレイを続けること妨げるためにボールを競技場の外に投げたりする。

このような行動の仕方は、われわれの競技場から抹殺しなければならない。これがルール17：14に対するわれわれの提案の真意である。

これは、非スポーツ的な行動の範疇に属するものであり、またくりかえされたルール違反に属するものである。

【17：13】

17：13…このルールは絶対に消滅しなければならないルール違反に属するものである。RSKは粗

暴なプレイのすべてのできごとを取り除くために斗うことをなおざりにすべきではない。もしわれわれのこの努力が、レフェリーによって全面的に支持されなければルールの正しい適用は絶えず諸々の困難に突きあたるであろう。

「粗暴なプレイ、すなわち故意にあるいは無責任に危険な行為（6：8）をした場合には、レフェリーはフリースローまたはペナルティースロー（6：8）の判定を下し、その反則をおかしたプレイヤーを5分間の退場にしなければならない。

同一プレイヤーまたは他のプレイヤーがくりかえした場合には、それをおかしたプレイヤーは直ちに失格にすべきものとする。そのチームは5分間の退場時間が経過した後はじめて再び補充することができる。」（17：13）

その際何を堅持すべきか？

第一にこの提案は粗暴なプレイの定義をよりよくしようとするものである。われわれの委員長はこの本文に更に詳しく立ち入るであろう。がしかし今ここでルール6：8について述べておきたい。

相手をしっかりつかまえること

相手を片腕または両腕でつかまえること。相手を両手で妨げること

相手を殴ること。相手を突くこと

相手に走ってぶつかることまたは跳んでぶつかること。

相手に脚を出すこと。相手の前に身を投げだすこと倒れる。またはその他の仕方で相手に危険をあたえる。

故意にあるいは不手ぎわから、あるいはまた無責任な行為から、これらの行為の一つがプレイヤーを危険におとしいれたその瞬間に粗暴なプレイは常に生じている。

RSKは諸氏の助力を得て、ハンドボールのこの癌をなくそうと試みている。このための手段は、前もって警告することなく即時5分間の退場をさせると共に状況によってフリースローまたはペナルティースローをすることである。

この提案はさらに、その違反が同じプレイヤーまたは同じチームの他のプレイヤーによってくりかえしておかされた場合には、失格で罰せられることを含んでいる。

要約すると、われわれはこれらの提案を諸氏の熟考にゆだね、諸氏がわれわれとともに最善の解決を見出すことを願うということである。

1　現在のルールは2つのタイプのルール違反を含んでいる。

a　競技場の内または外において、ルールに違反した行為に対してプレイヤーまたはチームの役員を罰すること。

b　競技場において、3度目に退場させられたプレイヤーを罰すること。

提案は、新らしい種類の失格をつくりだして統一をやぶることを敢て行なおうとするものである。

2　私は、粗暴なプレイをしたプレイヤーはきびしく罰せられること、および5分間の退場は多くの場合正当化されているということを認めるものである。

しかしながら私は、非スポーツ的な行為は最初の罰にもかかわらず、きびしい罰ではあるが5分の退場、追放または失格を正当化するかどうか考慮しているものである。

私はこれに確信をもって答えることができない。

われわれは、きびしくあらねばならないということは知っているがしかし、すべては常にその状態によるものである。

例えば、げんこつで殴ることももしもその原因が全くない場合、あるいはまた相手に罵倒されたことによってそれが挑発された場合には、決して大きな意議をもたない。

3　もし私が、くりかえされたルール違反に対してある程度のきびしさをもってこれに抵抗することに賛成するならば、私個人としては、反則をおかしたプレイヤーがことによると挑発されたようなときには、失格または追放というきびしい罰をもって罰することを躊躇するものであることを打ちあけなければならない。

最終的に私が言っておきたいことは、私は絶対に自分が正しいと主張するものではないということである。

自分の熟考したことを諸氏にお知らせすることが私の意とするところであり、さらにまた私の質問に諸氏が立ち向い対決してほしいと願うものである。

それは果して死が犯行を全く無くするかどうか自問することがある人生のようなものである。

どうか諸氏はそれぞれこれについて熟考してほしい。

諸氏もそして私も、ハンドボールがいつまでも真のスポーツであることを願っていることを心から信じて疑わない。

そして、われわれの青少年が競い合い対決することが、ただ単に相手に勝つばかりでなく、自分自身にうちかつよすがとなり、単なる攻撃に堕することなく真に健全な攻撃性を助長し振興することになるのである。（了）

◇参考・IHF技術委員会組織と現在の委員長＝▽「競技規則と審判の委員会」（エミール・ホルレ）▽「競技委員会」（カート・ワドマーク）▽「コーチ委員会」（イオン・クンスト）▽「医事委員会」（イストバン・マダラッツ）▽「普及・広報委員会」（ベルンハルド・チェリ）

小松市女、二度目の完全（全日本高校・国体）優勝

地元三重、全種別に4位以内

三重国体

年令別を初採用した第30回国民体育大会（みえ国体）ハンドボール競技は、10月27日から31日まで四日市高グランドを主会場に、全国から5種別80チームが参加して華やかに行われた。

雨天に見舞われる日が多かったが、各試合とも好内容でコートサイドを沸かし、特に少年女子で、石川代表となった小松市女高は48年度（第28回）につづく、インターハイ、国体の〝完全優勝〟を遂げて賞讃をあびた。高校女子で2度この偉業をなしとげたのは同校が初めて。

18チームによる少年男子は山口（岩国工高）が地力を示した。

成年（一般）は男女とも予想どおり実業団を送りこんだ各県が強く、男子は愛知（大同製鋼）が、女子はホームコートの三重（田村紡）が栄冠を得た。

同教員は、大阪（大阪イーグルス）が堅城を守り、順当な結末となった。

総合得点争いは、男女総合が全種別で4位内入賞を果たした三重県、女子総合は三重県、石川県の両者が1位を分けあった。いずれも初。

なお、総合閉会式（10月31日、伊勢）で、三重県の全スポーツウーマンを代表して、田村紡・三毛直子選手が皇后杯の受賞者となる栄光を受けた。現役ハンドボール選手が、この大役に選ばれたのは初めてのこと。

来年の第31回国体ハンドボール競技は、10月25日から29日まで佐賀県神埼町で行われる。

成年男子・一般（32チーム）

▽1回戦

愛知（大同製鋼）41（18－4、23－6）10 高知（高知ク）

神奈川（全神奈川）23（10－5、13－11）16 長野（全長野）

宮城（仙台育英高OB）12（11－5、10－12）17 沖縄（沖縄選抜）

広島（三菱レーヨン大竹）19（8－6、11－3）9 奈良（生駒ク）

栃木（AOK栃木）35（15－9、20－5）14 鹿児島（海自第一航空群）

青森（青森ク）15（7－5、6－8、1－0、1－1）14 岐阜（二和家具）

山口（徳山ク）19（9－7、10－6）13 富山（氷見ク）

埼玉（大崎電気）25（10－9、15－3）12 京都（京都ク）

三重（本田技研鈴鹿）34（15－3、19－10）13 福島（福島SGク）

愛媛（住友化学菊本）18（6－4、12－7）11 長崎（佐世保ク）

石川（金沢市役所）17（6－5、11－10）15 岡山（倉敷ク）

和歌山（丸善石油下津）27（11－10、16－8）18 群馬（富岡ク）

東京（三景）32（18－8、14－11）19 福岡（ブリヂストンタイヤ）

兵庫（神戸製鋼）26（12－6、14－6）12 北海道（函館有斗ク）

千葉（自衛隊下総）24（10－7、14－7）14 岩手（盛岡商友会）

大阪（湧永薬品）25（14－2、11－7）9 静岡（静農ク）

○……栃木、青森の健斗が目立った。栃木は序盤こそ鹿児島の先行を許したが、前半なかばからは小竹、山田、宮田らムラのない攻撃力で鹿児島を圧倒。

青森は再三のリードを岐阜の粘りにあって追いつかれたが延長前半三上、後半葵があげた得点を守り切った。

山口×富山は、国内の代表的なクラブ同士とあって熱がこもった後半15分13－11と予断を許さなかったが、このあと山口は二本のPTなどで連続3点、これが利いた。

このほか、京都、奈良、長崎、群馬、岡山らが実業団単独の相手に前半互角の善戦をみせた。

山口、埼玉に食い下る

▽2回戦

愛知 27（12－6、15－7）13 神奈川

広島 26（13－4、13－8）12 宮城

栃木 24（11－8、13－8）16 青森

埼玉 16（8－7、8－5）12 山口

三重 27（13－5、14－3）8 愛媛

石川 21（9－7、12－6）13 和歌山

東京 29（16－3、13－8）11 兵庫

大阪 32（15－7、17－4）11 千葉

○……山口が埼玉を苦しめた。埼玉は前半終了間ぎわ1点をリードしたが、山口は後半4分タイ。そのあと埼玉が佐藤の活躍で15分12－8と主導権を握ったが、山口は相本、明石らで粘り終盤に興味をつないだ。しかし、守りを固めた埼玉を突き切れず善戦空しかった

石川×和歌山は、和歌山が後半5分すぎ一気に追いこんで11－12としたが、石川は橋本の巧技などで連続5点、大勢を決めた。

栃木×青森も気力充実した一戦だったが、栃木が立ちあがりにつかんだ優位を巧みに活かした。

大阪、東京を振り切る

▽準々決勝

愛知 22（8－4、14－9）13 広島

○……愛知はよく走り、ポスト、ロングと多彩な攻めで11分4－0

広島もペースをつかんで反撃、一進一退となったが、後半になると、愛知の矢次早の攻撃に広島は防戦一方となり、わずかに大江の個人技で得点したにとどまった。

（吉川充滋）

埼玉 28（13－5、15－3）8 栃木

○……栃木は埼玉の固いディフェンスを攻め切れず、パス、キャッチのミスも多く、前半20分10－3と点差を開かれた。

埼玉は終始余裕があり、特に後半15分以降は相手を完封、攻めては連続9点をもぎとる圧倒ぶりだった。（朱宮幸夫）

三重 36（18－6、18－7）13 石川

○……三重は詰めの早い守りから相手のパスプレーをカット、新実の強肩を中心に多彩な攻めこみであっさり主導権を握った。
石川も北野の巧妙なフェイントプレーなどで頑張ったが、スケールの差はどうしようもなく、終盤は一方的な経過をたどった。（奥村方志）

大阪 24（12－7、12－7）14 東京

○……優勝候補同士。大阪は木野（全日本）を中心にボールを巧みにつなぎ穂積（全日本）のロングなどで先行した。東京は好機をつかみながら決め手に欠け、徐々に点差を開かれ、後半15分17－10と勝負がついた。（高山宗学）

▽準決勝

愛知 16（8－7、8－3）10 埼玉

	【埼玉】	得	【愛知】	得
GK	岩下	0	柳川兄	0
GK	福本	0	倉谷	0
FP	飯田	5	野田	0
FP	東	1	藤中	2
FP	荒井	0	柳川弟	2
FP	佐藤	1	中井	3
FP	井手	1	松原	1
FP	小松原	0	花輪	0
FP	橋本	2	北村	1
FP	坂口	0	守田	0
FP	前渕	0	大原	4
FP	新田	0	中本	3
PT	(2)	10	(3)	16

（審・光島、新村）

○……両チームとも中盤までは相手の固い守りにあって思うように得点があげられなかったが、全日本選手5人を揃えた愛知は、15分すぎから本領を発揮、中井（全日本）を軸に多彩な攻めから5点差をつけた。
後半、埼玉も粘ったが11分7－11としたまでで、20分には15－8と振りほどかれた。愛知の貫禄勝ちといえよう。（石野誠）

年次優勝都道府県

	【天皇杯】	【皇后杯】
③昭23	大阪	大阪
④	大阪	岡山
⑤	大阪	岡山・大阪
⑥	岡山	岡山
⑦	愛知	愛知
⑧	大阪・北海道	北海道
⑨	大阪	大阪
⑩	愛知	福岡
⑪	愛知	福岡
⑫	愛知	愛知
⑬	大阪	茨城
⑭	大阪	宮城・福岡
⑮	愛知	愛知
⑯	東京	愛知・茨城
⑰	愛知	熊本
⑱	○山口	○山口
⑲	○新潟	東京
⑳	○岐阜	熊本
㉑	大阪	熊本
㉒	○埼玉	○埼玉
㉓	熊本	熊本
㉔	○長崎・埼玉	熊本
㉕	大阪	大阪
㉖	○和歌山	秋田・熊本
㉗	○鹿児島	熊本
㉘	○千葉	○千葉
㉙	大阪	○茨城
㉚昭50	○三重	○三重・石川

・○印開催県　・両杯制定は第3回

三重、大阪に大逆転

三重 12（7－4、5－7）11 大阪

	【大阪】	得	【三重】	得
GK	今井	0	細野	0
GK	福井	0	牧原	0
FP	市原	0	勝田	0
FP	木野	1	佐藤	7
FP	菅	0	田上	0
FP	森	0	新実	0
FP	高橋	3	柳	1
FP	戸田	1	長谷川	2
FP	松井	0	喜井	1
FP	松本	1	宮川	0
FP	津川	0	矢野	0
FP	穂積	5	金子	1
PT	(0)	11	(2)	12

（審・小西、藤本）

○……残り5分で11－9。大阪の勝ちは固いとみえた。ところが三重は、地元の声援に応えて粘り、25分金子、26分長谷川で同点としたあと、28分佐藤（全日本）がなだれこんで逆転するというはなれ技を演じた。
大阪は前半終了間ぎわに2点先行、後半もいちど引っくり返されながら、すぐに追い抜きペースを掴んでいただけに悔やみ切れまい
互いに手の内を知りつくした実業団同士。終始、壮烈な肉弾戦となりコートサイドをわかす好試合だった。（吉田定静）

▽3位決定戦

埼玉 14（9－5、5－8）13 大阪

▽決勝

愛知 17（11－8、6－7）15 三重

○……残り5分で13－14。前日の大逆転再現を期待する地元ファンは三重に大声援を送ったが、キャリア豊かな愛知は26分松原、28分藤中（ともに全日本）で16－13、28分

	【三重】	得	【愛知】	得
GK	細野	0	柳川兄	0
GK	牧原	0	倉谷	0
FP	勝田	0	藤中	4
FP	佐藤	3	中井	3
FP	田上	1	柳川弟	5
FP	柳	0	花輪	0
FP	新実	5	松原	4
FP	長谷川	3	大原	0
FP	喜井	2	野田	0
FP	金子	0	守田	0
FP	宮川	0	中本	0
FP	矢野	1	北村	1
PT	(2)	15	(0)	17

（審・新村、光島）

粘る三重の希望をたち切った。
後半なかばまでは好調の新実を軸に三重が押し気味。しかし10分10－9のあと守りの気負いすぎで反則退場がつづき、愛知につけこまれたのが痛かった。好試合。（西川勤也）

成年男子・教員（10チーム）

大阪が9度目の優勝

▽1回戦（2試合）

静岡 15（9－5、6－8）13 鹿児島

福島 29（17－6、12－9）15 北海道（鶴陵ク）

▽準々決勝

大阪（大阪イーグルス） 20（8－8、12－5）13 静岡

茨城 26（13－8、13－3）11 高知

三重 20（10－6、10－5）11 岡山

福島 26（16－8、10－7）15 福井

○……波乱なく、順当な顔ぶれが残ったが、なかでも福島の充実はみごと。上野、佐藤の秀れた得点力を主武器に、北海道戦では19－12から一気に8ゴールを積みあげ福井戦でも後半いきなり、連続6点とたたみかけた。
このほかでは、静岡が5－13の劣勢から激しく追いこんで後半13分10－14まで追い詰めた善戦が光った。

▽準決勝

大阪 12（8－6、4－5）11 茨城

	【茨城】	得	【大阪】	得
GK	大村	0	本田	0
GK	谷萩	0	広川	0
FP	池田	4	高橋	2
FP	中村	3	池本	5
FP	塚田	4	足羽	1
FP	高野	0	安達	2
FP	大川	0	河原崎	1
FP	松金	0	福井稔	1
FP	立原	0	島崎	0
FP	福永	0	井上	0
FP	細谷	0	青木	0
FP	中山	0	福井孝	0
PT	(1)	11	(3)	12

（審・小西、藤本）

○……大阪は危ない勝利だった。後半28分11－11に追いつかれ、さらに河原崎の退場というピンチを招いたが、残り1分25秒にあげた池本のゴールを辛くも守り逃げ切った。
茨城は後半なかば6－7から塚田の大活躍で一気に9－7としたが、その勢いを保てず、大阪の巧さにやられた。（浅野克彦）

三重 25（16－6、9－6）12 福島

○……元気な福島も、三重の練習量豊かな攻防には一歩をゆずった。
前半の福島は先行する場面もあったが、後半は20分までに2点という単調な攻撃で勝機はなかった（狩野幸介）

得	【福島】		【三重】	得
0	遠藤	GK	神谷	0
0	富田	GK	山下	0
4	佐藤	FP	夏目	4
1	後藤	FP	山内	4
6	上野	FP	坂本	5
0	石井	FP	松ケ谷	4
0	伊藤	FP	宇尾野	4
1	菱沼	FP	川畑	2
0	佐々木	FP	平賀	0
0	安部	FP	西村	1
0	塩田	FP	中森	1
0	高野	FP	中根	0
12	(2)	PT	(3)	25

（審・浅野 稲石）

▽3位決定戦

茨城 21（10—8 11—5）13 福島

▽決勝

大阪 14（7—4 7—6）10 三重

○……接戦模様の4—3から相手のFTボールをはたき落としてもちこみ、得点に結びつけた福井稔のぬけ目のないプレーが、その後の戦局を左右した。

三重はそれまで互角にわたりあい、予断を許さなかったのだが、この1点で、精神的にゆさぶられた。

得	【三重】		【大阪】	得
0	神谷	GK	本田	0
0	山下	GK	広川	0
2	夏目	FP	高橋	0
1	山内	FP	池本	0
3	坂本	FP	足羽	2
1	松ケ谷	FP	安達	3
1	川畑	FP	河原崎	2
2	宇尾野	FP	福井稔	5
0	平賀	FP	青木	0
0	西村	FP	福井孝	0
0	中森	FP	井上	1
0	中根	FP	島崎	1
10	(0)	PT	(4)	14

（審・稲石 奥村）

巧者を揃えた大阪は、後半4分から連続4点、11—5とはなし、要所をGK本田（全日本）が締めて危気なかった。

三重は、GK神谷の好守がなければ、かなり点差をはなされたろう。

（杉山 茂）

三重、健斗の愛知を制す

石川、福島を破る

成年女子（10チーム）

▽1回戦（2試合）

山口（徳山ク）29（13—0 16—4）4 北海道（室蘭OG）

愛知（プラザ—工業）14（6—3 8—1）4 大阪（寝屋川ク）

▽準々決勝

三重（田村紡）20（7—1 13—5）6 山口

石川（北国銀行）12（4—4 8—5）9 福島（東北ムネカタ）

茨城（日本ビクター）39（16—3 23—1）4 愛媛（新居浜商高OGク）

愛知 10（3—5 7—3）8 熊本（立石電機）

○……石川が福島を降す波乱をおこした。石川は鍋島の好リードで全員がのびのびとプレー、福島は前半をタイにおさめたものの、後半5—4から3点を失ってすっかり動きが鈍くなった。

両者のこの精神的な差がスコアに現れたようで、石川は山際、貝野の好シュートから20分には11—8とリード、福島を突き放した。

熊本が愛知に逆転負けを喫したのもコートサイドをわかせた。

熊本は後半3分7—4と開き主導権を握ったかにみえたが、そのあと愛知の強い当りとGK井戸田の堅守に追加点を阻まれたのが痛い。愛知は宮平、佐々木の活躍で9分7—7、10分佐々木でリードさらに15分原川、22分小森（全日本）が追い討ちをかけた。

クラブ勢では伊藤をもつ山口の奮戦が目立ち、大阪は愛知を相手に前半15分3—1とリードしたまでが精いっぱいだった。

勢いにのる愛知、茨城降す

▽準決勝

三重 13（8—0 5—3）3 石川

得	【石川】		【三重】	得
0	竹下	GK	久保	0
0	屋敷	GK	鈴木逸	0
0	鍋島	FP	沖	0
0	千歩	FP	三毛	1
0	北村ひ	FP	横山	2
1	貝野	FP	金田	1
1	山際	FP	松下	5
0	西出	FP	鈴木洋	1
0	北村早	FP	河田	2
0	越栄	FP	林	0
1	島野	FP	笠	1
		FP	平田	0
3	(1)	PT	(1)	13

（審・梅田 幸田）

○……福島を破った相手とあって三重は慎重。それが固さとなって9分間無得点。しかし、10分松下（全日本）のゴールが決まってからようやく滑らかな動きとなり、金田、笠らで一気に8—0と拡げた。

石川も最後まで粘ったが、スピード差が露れ空しかった（鈴木城）

愛知 12（2—3 6—5 ⋮ 2—0 2—0）8 茨城

得	【茨城】		【愛知】	得
0	渡辺	GK	井戸田	0
0	鈴木	GK	山本	0
0	蓮見	FP	原川	4
1	額賀	FP	山中	0
3	加藤	FP	楠石	0
2	穂積	FP	小森	7
0	斉藤	FP	木下	0
0	小島	FP	宮平	0
0	染谷	FP	国府田	1
0	笹沼	FP	佐々木	0
2	池田	FP	山口	0
0	高野	FP	中川	0
8	(2)	PT	(3)	12

（審・狩野 岡本）

○……後半20分8—6茨城ペースで試合は進んだが、好調の愛知は残り1分でタイに追いつき延長。こうなると愛知の勢いが優位となり前半原川、小森で初のリード、後半も押しまくって強味をみせつけた。

茨城は後半15分以降、穂積（全日本）の1点にとまった貧攻が敗因だが、残り5分2点のリードを守り切れなかったのも拙い（石野）

▽3位決定戦

茨城 18（10—2 8—4）6 石川

▽決勝

三重 8（4—5 4—2）7 愛知

○……三重の勝利は後半23分愛知国府田のノーマークシュートを鮮やかに防いだGK久保（全日本）の美技で決まった。

一千人近い観衆の期待のまなざしをうけて、さすがに三重は固くなっていた。シュートは強風に乗って上ずるし、頼みの三毛は、中川の好マークにあって動けない。

得	【愛知】		【三重】	得
0	井戸田	GK	久保	0
0	山本	GK	鈴木逸	0
2	原川	FP	沖	0
0	山中	FP	三毛	0
0	楠石	FP	横山	0
2	小森	FP	金田	1
0	木下	FP	松下	7
1	宮平	FP	鈴木洋	0
0	国府田	FP	河田	0
1	佐々木	FP	林	0
0	山口	FP	笠	0
1	中川	FP	平田	0
7	(1)	PT	(3)	8

（審・岡本 狩野）

後半10分6—7と明きらかに不利。ここで松下が強引に突っこみ2本のPTを得た。愛知の必死のディフェンスを逆利用したプレーで、しかも松下自らこの2本を決めて逆転したのである。

結果からいえば愛知はこの松下のかけ引きに負けた。

GK久保の美技とともに、その好判断を賞したい。味（あじ）のあるすばらしい決勝戦だった。

（杉山）

山口（岩国工）が快勝

少年男子（18チーム）

▽1回戦（2試合）

愛知（高校選抜）9（5—3 4—3）6 広島（高校選抜）

北海道（函館有斗高）13（6—5 7—4）9 兵庫（高校選抜）

▽2回戦

愛知 16（7—4 9—6）10 大阪（全大阪）
東京（高校選抜）17（11—5 6—5）10 宮城（仙台育英学園高）
三重（選抜）23（12—5 11—6）11 福井（高校選抜）
鹿児島（高校選抜）18（4—5 14—3）8 愛媛（宇和島南高）
秋田（全秋田）9（4—1 5—4）5 石川（小松工高）
静岡（全静岡）12（7—2 5—7）9 香川（三本松高）
沖縄（高校選抜）19（11—5 8—8）13 茨城（高校選抜）
山口（岩国工高）22（8—3 14—3）6 北海道

○……どの試合も若い力がみなぎり好内容だった。

愛知×広島は後半すぐ5—5の振り出しにもどったが、愛知がそのあとの好機を着実に活かした。

北海道×兵庫は5たび同点のあと北海道は阿部の好シュートで兵庫を振り切った。

2回戦では1点の劣勢からあっという間に逆転、大勝のペースにのせた鹿児島、小柄ながらスピードのあるチームプレーで茨城を降した沖縄の九州勢が目立った。

また静岡×香川は、後半17分5—11から香川が猛反撃、好感のもてる試合ぶりをみせた。

このほか秋田×石川、愛知×大阪のせりあいでもつれ、山口、三重の地力も注目されるものがあった。全般にGKに好人材が目立った。

▽準々決勝

鹿児島、残り10秒で涙のむ

感知 15（8—6 7—6）12 東京

○……前半なかばまでは、東京の速攻に分があったが、愛知は15分すぎから反撃してペースを奪い返した。

後半は、愛知が大たんなスカイプレーなどで優位をキープ、東京は激しい追いこみで24分12—14まで詰めたが、愛知は24分10秒貴重な1点を加え、かわした。（河野好央）

三重 10（4—4 6—5）9 鹿児島

○……好試合。三重はたえず先行したが鹿児島もひるまず、後半11分には7—5と逆にリードした。

三重は15分7—8から16分PTで同点のあと18分三浦で待望の勝ちこした。

しかし、鹿児島は20分馬場で9—9とし、延長かとみえたが、三重は残り10秒太田が劇的な1点をマーク、熱戦にケリをつけた。（中井泰彦）

秋田 19（9—4 10—7）11 静岡

○……前半、秋田は静岡の動きの鈍さをついて強引なカットインから15分5—2、20分8—3と点差を開いた。

後半になると静岡もリズムを取り戻し互角にわたりあったが、前半の失点を取り戻すまでにはいたらなかった。（藤井 證）

山口 16（9—4 7—6）10 沖縄

○……山口は上村、植木の好リードと泉（ヤング全日本）のダイナミックなシュート、沖縄は名嘉を中心にきびきびとした組織プレーと互いに持ち味を応酬、せりあいとなったが、後半20分11—9のあと山口は積極的な攻めをみせて決定的な5点をあげ、健斗の沖縄を振り切った。（新村理文）

▽準決勝

愛知、手固い攻守示す

四日市ピックアップ

□三重での評価高まる

○……男女とも総合優勝を飾った地元・三重県。

全競技の得点(両杯)争いでも、堂々の優勝を遂げたが、ハンドボールの栄光は、過去の実績もからんで、県体協関係者の評価がいちだんと高まり、閉会式（10月31日伊勢）の皇后杯（女子総合優勝）受賞者に、田村紡・三毛直子主将が推せんされた。

三笠宮寛仁親王殿下から皇后杯を受けた三毛選手は、二度三度と杯をかかげてスタンドから大きな拍手をあび、さすが国際舞台を踏んだ貫禄、と評判をよんだ。

ちなみに、三重県選手団（総勢862人）の旗手をつとめたのは本田技研鈴鹿の佐藤要二選手。三重におけるハンドボールの位置の大きさを示した。

□鮮やか、小松市女高

○……「選手がよくやってくれました。2度も完全優勝を果たせて監督冥利につきます」。少年女子優勝の石川・小松市女高監督、谷口俊春さんは、感無量の表情。

インターハイ、国体に連勝する——口では簡単にいうが、なみたいていの努力では遂げられない。

その偉業を2度までも記録したのだから、すばらしい。（男子は桜台高（愛知）が7度の快記録）

最初の時(昭48)は、俊敏な動きが看板、今年は大型アタッカーを軸にスケールの大きさが売りもの。

対照的なチーム造りを成功させた秘けつを谷口監督は「選手の気力と、父兄の理解につきる」と、教えてくれた。

□にくまれ役イーグルス

○……将来のスポーツ指導者ということで若い人材を計画的に〝入県〟させられる教員種目は、開催県にとって、期待の本命なのだが、その地元の夢をいつも砕く、にくまれ役がいる。大阪イーグルスだ。

これまで10回出場のうち地元代表との対戦が5回、いずれも勝っている。

しかも、4回は優勝をかけての一戦で、48年以降3年連続というもの。

さんざん口惜しがった地元ファンが、試合の終る頃には、イーグルスの巧さに感嘆させらせるという筋書き……。その勇名は、四日市でも一際高くあがった。

□流れたTV初中継

○……第3日、成年女子の準決勝三重—石川は、NHK・TVが当初から中継（録画）を予定。晴雨にかかわらず屋外コートと申し合わされていたものの前夜からの雨が降りやまず、放送中止になった。

NHKの国体中継は、ラジオが第6回(昭26)から、TVが第12回(昭32)から行われており、ハンドボールは、ラジオでは8回採りあげられているが、TVは今回が初めての計画。

それだけに関係者は、早朝から多量に砂を入れたり、水はけに懸命だったが、雨は激しくなるばかりで、日本協会、NHKともに断念した。

愛知 15（7―4、8―3）7 三重

得	【愛知（高校選抜）】			【三重（選抜）】		得
0	溝口	（名南工）	GK	棚瀬	（四日市工高）	0
0	森井	（名市工）	GK	川村	（四日市工高）	0
0	神	（名市工）	FP	森	（四日市工高）	0
5	中島	（桜台）	FP	五十棲	（四日市工高）	0
1	蟹江	（名南工）	FP	多湖	（四日市工高）	0
0	隠岐	（名南工）	FP	三厨	（四日市工高）	2
0	二村	（名市工）	FP	太田	（四日市工高）	2
2	犬飼	（東海）	FP	川上	（本田技研）	2
2	伊藤	（熱田）	FP	大橋	（四日市工高）	0
3	中村	（名市工）	FP	地頭所	（鳥羽商船）	0
2	村瀬	（名市工）	FP	三浦	（亀山高）	1
0	榊原	（名南工）	FP	蜂谷	（四日市工高）	0
15		（2）	PT	（1）		7

（審・大橋 吉田定）

○……軟いグランドがお互いの攻撃のリズムを崩した。

特に三重は前半6分3―2以後動きが思うようにまとまらず、この間愛知の堅実な攻めにあって点差を開かれた。

後半、三重はすぐに1点を返し期待をもたせたが、またしてもそのあと15分間無得点、愛知の手固い攻守に屈した。（嶋田新太郎）

山口 24（11―4、13―7）11 秋田

（注）秋田は佐藤（湯沢高）以外の11選手はいずれも大曲農高。

○……山口の豪放な攻撃が初手から爆発し8分早くも7―0。

秋田はすっかり機先を制せられてしまい散発的に得点するだけだった。

得	【山口】		【秋田】	得
0	中元	GK	小松博	0
0	大野	GK	寺村	0
3	上村	FP	千葉	1
5	植木	FP	打川	2
2	泉	FP	戸嶋	0
4	藤山	FP	斉藤久	3
8	坂本	FP	小松良	1
2	藤本	FP	岡部	2
0	山本	FP	富樫	1
0	中村	FP	斉藤敏	0
0	村重	FP	進藤	0
0	中本	FP	佐藤	1
24	（2）	PT	（3）	11

（審・浅野 吉田元）

後半も同じような経過で10分18―9と大勢が決した。（藤本 昇）

▽3位決定戦

三重 8（4―5、4―2）7 秋田

▽決勝

山口 13（9―3、4―3）6 愛知

得	【山口】		【愛知】	得
0	中元	GK	溝口	0
0	大野	GK	森井	0
1	上村	FP	神	0
2	植木	FP	中島	1
4	泉	FP	蟹江	1
2	藤山	FP	隠岐	0
3	坂本	FP	二村	0
1	藤本	FP	犬飼	2
0	山本	FP	伊藤	2
0	中村	FP	中村	0
0	村重	FP	村瀬	0
0	中本	FP	榊原	0
13	（0）	PT	（1）	6

（審・岡本 狩野）

○……8月のインターハイ決勝で涙をのんだ山口・岩国工の執念がすばらしい斗志となって現れ、さしもの愛知もねじふせられた。

前半こそ愛知の食い下りを許したが、後半になると多彩な攻撃と忠実な守りが際立ち、10分8―4と勝利を不動のものとした。

青木監督を肩車して優勝の感激にひたる山口セブンの顔は印象に残るものであった。（荒川清美）

大分の健斗及ばず

少年女子（10チーム）

▽1回戦（2試合）

大分（高校選抜）16（6―3、10―2）5 山口（徳山高）

愛媛（新居浜商高）12（7―3、5―5）8 秋田（和洋女高）

▽準々決勝

大分 9（6―1、3―4）5 大阪（高校選抜）

三重（選抜）12（7―2、5―4）6 北海道（函館商高）

茨城（高校選抜）9（5―2、4―1）3 静岡（清水市商高）

石川（小松市女高）8（4―1、4―2）3 愛媛

○……大分、石川の強さが目立った。

大分は、山口戦に大勝したあと連覇を狙う大阪に、前半先手をとられながら、後半は菅本豊（大分東高）を中心とした鋭い切りこみで逆転を遂げた。

石川も、秋田を破って勢いづいていた愛媛に、立ちあがりこそ粘られたが、時間とともに地力を発揮して差をあけた。

▽準決勝

大分 12（6―3、6―2）5 三重

得	【大分】		【三重（選抜）】		得
0	大平	GK	加納	（四日市高）	0
0	滝川	GK	岡田	（暁高）	0
0	高橋	FP	根本	（四日市高）	0
2	菅本豊	FP	若田	（田村紡）	1
2	重清	FP	川瀬	（暁高）	0
2	薬師寺	FP	駒田	（四日市高）	3
2	菅本清	FP	平田	（暁高）	1
3	姫野	FP	長谷川	（四日市高）	0
0	那須	FP	高橋	（暁高）	0
1	渡辺	FP	小林	（暁高）	0
0	木崎	FP	阿部	（四日市高）	0
0	坂井	FP	近藤	（四日市高）	0
12	（1）	PT	（0）		5

（審・杉本 石野）

（注）渡辺（別府青山高）以外の11選手はいずれも大分東高。

○……三重が序盤、固くなって凡ミスが多かったのに対し、大分は個人技を巧くつなぎ着実に加点、17分5―1と主導権を握り、それ以後も順調に試合を進めた。

三重は、地元の声援に応えようと最後まで粘ったが、追いあげ切れなかった。（吉田 元）

石川 8（4―7、4―0）7 茨城

○……後半10分、石川が7―1とリードした時は、そのままのペースで終るかにみえたが、茨城はこのあと素晴しい粘りをみせ、17分6―7まで詰めた。

石川は18分千歩のゴールで2点差をつけて余裕を取り戻した。

茨城は、前半の拙攻が悔やまれよう。（小西博喜）

▽3位決定戦

茨城 7（4―4、3―1）5 三重

得	【石川】		【茨城（高校選抜）】		得
0	酒谷	GK	滝ケ崎	（麻生高）	0
0	西川	GK	塙	（鉾田二高）	0
0	庄田	FP	箕輪美	（麻生高）	1
2	中山	FP	中川	（麻生高）	0
1	本田	FP	箕輪よ	（麻生高）	2
2	千歩	FP	鈴木	（麻生高）	1
3	木戸	FP	関口	（鉾田二高）	1
0	小野森	FP	磯山	（麻生高）	2
0	山下	FP	宮内	（麻生高）	0
0	西出	FP	藤原	（鉾田二高）	0
0	田中	FP	吉田	（麻生高）	0
0	八木	FP	郡司	（麻生高）	0
8	（2）	PT	（1）		7

（審・吉田 沢野）

▽決勝

石川 7（4―1、3―4）5 大分

得	【石川】		【大分】	得
0	酒谷	GK	大平	0
0	西川	GK	滝川	0
0	庄田	FP	菅本豊	2
1	小野森	FP	重清	1
1	中山	FP	薬師寺	0
1	木戸	FP	菅本清	1
4	千歩	FP	姫野	1
0	本田	FP	那須	0
0	山下	FP	渡辺	0
0	西出	FP	木崎	0
0	田中	FP	坂井	0
0	八木	FP	高橋	0
7	（1）	PT	（1）	5

（審・丸岡 藤井）

○……互角のスタートから大分は10分すぎPTと姫野のゴールで4―2と先行した。

前半終了1分前に1点差とした石川が、後半2分中山で4―4と振り出しへ戻したあとは両チームとも、まったく固くなり、決め手を出せない。

石川は11分PTで初のリードを奪い、15分すぎ連続ゴール、緊張を振りほどき、二冠を決めた。

大分は、後半、石川の好守備に封じこまれ、前半のリードも空しかった。（狩野）

中央、大阪体大破り宿願遂げる

中央（関東）が宿願をはたし，学生チャンピオンとなった——第18回（女子第11回）全日本学生選手権は，11月５日からの９日まで福岡市民体育館を主会場に全国８学連から推せんされた男子32，女子12校が参加して開かれた。

男子は，中央×大阪体大(関西)と東西No.１同士の決勝となり，早稲田(関東，前年優勝)，日体(関東)を連破して意気あがる大阪体大が先行したが，中央は後半，みごとな集中攻撃を実らせ初優勝した。

女子は，東女体大×日体の関東同士が２年連続７度目の優勝戦を演じ，東女体大が前半のリードを活かして快勝，６年ぶり２度目の栄冠を飾った。

女子は東女体大６年ぶり・全日本学生選手権

男子

金沢工大、甲南を破る
中京は慶応に圧倒勝ち

▽1回戦

早稲田（関東）22（14―7、8―3）10 福岡教大（九州）
近畿大（関西）16（8―4、8―8）12 愛知教大（東海）
国士館（関東）28（18―4、10―7）11 山口大（中四国）
大阪体大（関西）23（14―7、9―5）12 東北学院（東北）
東京教大（関東）26（14―7、12―2）9 大分大（九州）
日体（関東）30（19―2、11―1）3 北大（北海道）
金沢工大（北信越）18（11―9、7―6）15 甲南（関西）
中京（東海）25（10―2、15―3）5 慶応（関東）

＝以上、福岡市民体育館

芝浦工大（関東）22（11―6、11―2）8 同志社（関西）
九州産大（九州）29（17―7、12―2）9 仙台大（東北）
名城（東海）28（15―1、13―4）5 愛媛大（中四国）
法政（関東）13（8―3、5―1）4 大阪経大（関西）
大阪大（関西）20（10―9、10―4）13 熊本商大（九州）
日大（関東）23（12―5、11―8）13 金沢大（北信越）
明治（関東）23（13―5、10―7）12 京都産大（関西）
中央（関東）35（20―5、15―4）9 岐阜大（東海）

＝以上、西南学院大学体育館

○……市民体育館会場は、いわゆる地方勢の健斗が目立った。

特に金沢工大が中村、亀田、作田らの活躍で、リズムに乗り切れぬ甲南を振り切ったのは賞される

甲南は後半15分9―14のあと反撃して同点に追いついたが、再び金沢工大の攻撃を受けた。

中京の完勝ぶりもみごと。慶応は、まったく雑な攻守で、前半15分から後半20分まで1得点という惨めな試合に終った。

このほか、後半10分まで近大と互角にわたりあった愛知教大、大阪体大に食い下った東北学院などが好感のもてる試合ぶりを示した

○……西南学院会場は、ほとんど波乱がなく、好試合を期待された明治×京都産大も、せりあったのは序盤だけ。後半開始直後に見せた明治の鋭い攻撃に京産ディフェンスが崩れ10分15―10と興をそいだ。

力がこもったのは日大×金沢大金沢は佐野、池本の巧技で五分に試合を進めたが、地力にまさる日大は前半終了間ぎわから、桜井を中心にたたみかけ、後半5分14―9と開いて勝負を決めた。

法政×大阪経大は、互いに相手の好守備にあって得点が伸びなかったが、攻撃の多彩さで法政が一枚上、順当勝ちした。芝浦×同志社は、主柱・大庭を欠いて同志社に元気なく、一方的な展開だった

中央敗るの誤報

第1日の結果を報じた6日付各紙のうち全国紙のA、地元紙のB両紙が中央×岐阜大戦の勝者を逆に伝えたため「大番狂せ起きる」とばかりに騒ぎとなった。他紙をみて誤報と判ったものの、東京の日本協会には問合せの電話しきりだった。

九州産大、芝浦を降す

▽2回戦

早稲田 30（16―4、14―4）8 近畿大
大阪体大 30（15―5、15―6）11 国士館
日体 20（13―6、7―11）17 東京教大
中京 29（15―6、14―1）7 金沢工大
九州産大 26（4―1、2―2：10―11、10―9）23 芝浦工大
法政 20（10―5、10―7）12 名城
日大 24（12―10、12―7）17 大阪大
中央 32（18―10、14―4）14 明治

○……予想どおりの顔ぶれが勝ちあがった。

激戦を演じたのは九産大×芝浦九産大は終始押し気味で、特に後半21分19―15とリードした時はそのまま押し切るかにみえた。

ところが芝浦もよく粘り、残り35秒柳沢で20―20。延長となった。

延長後は逆に芝浦が先手をとりいちぢは2点差をつけたが、九産大は、残り3分22―23から最後の力をふりしぼり金谷で同点のあとエース中馬が連続ゴール、さらに磯口がダメを押す鮮やかな逆転をみせた。学生らしい好試合。

法政×名城は、法政が前半10分3―4の劣勢をはね返してからは主導権を握り、危気なかった。

日体×東京教大はもつれた。東教大は浜田、川原らの巧い動きとGK須波の堅守で一本調子の日体をおさえ、いちぢは4点差をつけた。後半15分を過ぎるあたりから日体もようやく調子づき14―14。一進一退のあと23分半田、24分坂本で18―16とし辛くも逃げ切った

敗者のなかでは、最後まで反撃の態勢を崩さず追撃をかけた大阪

歴代優勝校

男	①（昭33）	芝浦工大
	②	芝浦工大
	③	芝浦工大
	④	芝浦工大
	⑤	芝浦工大
	（以上11人制）	
	⑥（昭38）	立教大
	⑦	芝浦工大
	⑧	芝浦工大
	⑨	芝浦工大
	⑩	立教大
	⑪	日体
	⑫	日体
	⑬	日体
	⑭	日体
	⑮	日体
	⑯	法政
	⑰	早稲田
	⑱（昭50）	中央
女	①（昭40）	日体
	②	日体
	③	日体
	④	日体
	⑤	東女体大
	⑥	日体
	⑦	日体
	⑧	日体
	⑨	日体
	⑩	日体
	⑪（昭50）	東女体大

大のマナーが賞されよう。

早稲田、連覇の夢消ゆ

▽準々決勝

大阪体大 17（10−5、7−8）13 早稲田

【早大】

	選手	得
GK	安田	0
FP	山田	1
	山高	6
	明石	0
	鈴木	2
	泉	3
	洞ケ瀬	0
	北里	0
	武井	1
	石川	0
	吉見	0

（審・柳井、槇）

【大体】

	選手	得
GK	藤井	0
	阪下	0
FP	根本	6
	矢辺	3
	池本	0
	平谷	0
	池田	1
	西上	4
	北川	0
	丸井	2
	佐々木	0
	能波	1

17（0）PT（4）13

○……互いによく走り好テンポの展開、勝負のかかった後半14分、大体大は11—11から西上の連続得点と根本で14—11としたプレーが勝因になった。早大は負傷者をだしながら健斗、前回優勝校の名に恥じぬ試合ぶりといえた。（山形　久）

日体 23（13−13、10−5）18 中京

【中京】

	選手	得
GK	横山	0
	後藤	0
FP	布垣	3
	佐藤	4
	岸見	6
	三宅	2
	野田	0
	村山	1
	西脇	2
	小島	0
	木村	0
	中野	0

（審・近藤、三友）

【日体】

	選手	得
GK	斉藤将	0
	清水	0
FP	菅野	5
	斉藤幸	2
	坂本	3
	大房	1
	広瀬	1
	後川	4
	半田	4
	原田	1
	大西	2
	三谷	0

23（2）PT（2）18

○……同タイプのチームといえたが、スピードとパスプレーに優る日体は、前半5分すぎから連続7ゴール、優位に立った。

中京も後半は佐藤、岸見で対抗したが、前半の失点が大きすぎた。（柳井文治）

★男子ベストセブン

▽GK　柴田　正章（法政）
▽FP　大熊　昌己（中央）
　　　西窪　勝広（中央）
　　　根本　義則（大体）
　　　村田　幸男（法政）
　　　菅野　肇（日体）
　　　中馬　成一（九産）

法政 13（5−3、8−6）9 九州産大

【九産】

	選手	得
GK	松高	0
	林田	0
FP	中馬	3
	磯口	2
	青柳	4
	藤春	0
	柳井	0
	満重	0
	北森	0
	金谷	0
	小林	0
	坂本	0

（審・松尾、佐伯）

【法政】

	選手	得
GK	柴田	0
	由利	0
FP	村田	5
	上滝	2
	青山	1
	阿部	4
	古関	1
	辻	0
	橋本	0
	中野	0
	田尻	0
	水本	0

13（1）PT（0）9

○……好調の九産大は堂々の勝負で立ちあがりの劣勢を挽回、22分青柳が得点5—4と逆転した。

しかし法政もせりあいは得意。阿部の巧技などで主導権を奪いかえしたあと、後半13分まで相手の攻撃を0におさえた。

九産大は後半15分8—9と追いすがったが、法政は守りを固めかわした。

法・村田、GK柴田（ともに全日本）、九産・中馬と学生界を代表する好選手を軸に好内容の試合だった。（近藤正行）

中央 27（10−4、17−6）10 日大

【日大】

	選手	得
GK	大畑	0
FP	菊地	1
	阿部	2
	犬塚	1
	田山	0
	桜井	3
	新井田	1
	前島	0
	今井	2
	堂尻	0
	山口	0

（審・五島、白根）

【中央】

	選手	得
GK	田村	0
	小松	0
FP	大熊	4
	戸田	1
	蒲生	5
	西窪	10
	金沢	4
	関	3
	坪子	0
	大林	0
	長野	0
	由利	0

27（2）PT（0）10

○……勝負は前半16分6—3まであとは中央が西窪、金沢、蒲生（全日本）らで容しゃなく得点を重ね後半12分には20—7と大差がついた。（松尾勝也）

大阪体大、日体を押し切る

▽準決勝

大阪体大 14（6−2、8−5）7 日体

【日体】

	選手	得
GK	斉藤将	0
	清水	0
FP	半田	0
	後川	0
	斉藤幸	2
	菅野	2
	坂本	0
	大房	1
	広瀬	0
	原田	0
	大西	2
	三谷	0

（審・三友、近藤）

【大体】

	選手	得
GK	藤井	0
	阪下	0
FP	根本	3
	西上	1
	池田	2
	矢辺	3
	池本	0
	丸井	4
	能波	1
	北川	0
	佐々木	0
	平谷	0

14（0）PT（1）7

○……日体は新鋭・大西の活躍などで前半15分5—2と先行したがそのあとミスが多く、大阪体大になだれこまれて、あっさり優位を失った。

後半、日体は2分1点を返したが、シュートミスから好機をつぶし25分間無得点、一方の大阪体大は根本、矢辺らが確実に加点。波にのったチームの強さをまざまざとみせつけた。

関西勢の決勝進出は5年ぶり3度目。大阪体大は初。（槇　敏夫）

法政、後半の反撃遅し

中央 17（8−9、9−5）14 法政

【法政】

	選手	得
GK	柴田	0
	由利	0
FP	村田	6
	辻	2
	古関	0
	阿部	2
	上滝	3
	青山	1
	橋本	0
	水本	0
	角本	0
	中野	0

（審・槇、柳井）

【中央】

	選手	得
GK	田村	0
	小松	0
FP	関	4
	金沢	1
	西窪	3
	蒲生	1
	戸田	7
	大熊	1
	坪子	0
	大林	0
	長野	0
	大久保	0

17（1）PT（5）14

○……法政は前半5点のうち3点がPT。中央の執ような当りに得点機をつかめず、完全にペースを奪われたため、終盤の15分間で9点をあげる猛反撃も空しいものになった。

相手の手の内を知っている中央の策戦勝ちともいえるが、やはりこの一番を〃事実上の決勝〃とみて臨んだ中央の気力が上廻ったといえる。

戸田、西窪、関らの巧技で後半12分13—5。このあと法政の反撃がなければ味気ない試合に終るところだった。（伏見和則）

▽3位決定戦

日体 29（18−12、11−6）18 法政

▽決勝

中央 15（9−7、6−7）14 大阪体大

【大体】

	選手	得
GK	藤井	0
	阪下	0
FP	根本	4
	矢辺	2
	池田	3
	西上	3
	能波	2
	丸井	0
	平谷	0
	池本	0
	佐々木	0
	北川	0

（審・佐伯、松尾）

【中央】

	選手	得
GK	田村	0
	小松	0
FP	大熊	4
	戸田	3
	蒲生	3
	西窪	2
	金沢	3
	関	0
	坪子	0
	大林	0
	大久保	0
	長野	0

15（2）PT（0）14

○……互角の滑り出しから、まず中央が15分5—3と先行したが大阪体大は相手ミスをついて23分6—5と逆転、そのあと互いに1点づつを加えて勝負を後半に持ちこんだ。

○……中央は後半5分までに2点大阪体大は1点と戦況は再び振り出しへ戻った。

11分、中央はPT（大熊）でリードを奪い、14分戸田がサイドからシュートを決め11—9。これで余裕が生じたのだろう。ディフェンスでの動きもよくなり、失点をとめる一方、18分蒲生（全日本）、19分大熊が好シュート、4点差。

○……大阪体大も粘り、根本が果敢なプレーを連続させ、24分13—14と予断を許さなかったのだが、中央は26分大熊が貴重なポイント。そのあとの相手の反撃を1点におさえこみ、宿願の初優勝を飾った。

東西両雄の対決にふさわしい白熱戦と云えた。（藤田信義）

日体の6連覇ならず

女子

▽1回戦

山口大（中四国）13（8−4 2−6 …… 2−1 1−1）12 岐阜大（東海）

武庫川女（関西）14（5−2 9−4）6 日女体大（関東）

中京女（東海）14（4−2 10−2）4 福岡教大（九州）

大阪体大（関西）11（7−4 4−3）7 東京教大（関東）

○……山口大×岐阜大は、山口が後半2分9−4として勝負はみえたと思えたが、そのあと二本のPTを奪われ調子を乱し、あっという間に点差を詰められ、第1戦早々、延長へもつれこんだ。

延長後は勢いにのる岐阜大が永井で先行したが、山口はそのあと連続3点、遠まわりの末、勝利を握った。

注目の大阪体大×東京教大は、大阪教大が4−3から船橋の活躍で一気に引きはなし、後半は大竹が巧技をみせ、押し切った。

他の2試合は順当。武庫川・辻中京女・立川の攻撃力が光った。

★女子ベストセブン

▽GK　鍋田美佐子（東女体）

▽FP　赤岸恵美子（東女体）
岩永満貴子（東女体）
林　ふじ（日　体）
小田恵美子（日　体）
山田美代子（東学大）
岩井　絹子（武庫川）

大阪体大、反撃も散発的

▽準々決勝

日　体（関東）18（11−1 7−3）4 山口大

○……総合力に優る日体が終始自己のペースで試合を進め楽勝。

山口は秋村を軸に反撃を狙うのだが、相手ディフェンスの詰めを突き切れなかった。（槙）

武庫川女 13（7−2 6−3）5 中京（東海）

○……前半13分までは互角に進んだがなかばを過ぎてからは武庫川の多彩な攻撃が実り、守っても手固い動きで中京を封じ、つけ入るスキを与えなかった。（三友英巧）

東京学芸大（関東）13（8−0 5−6）6 中京女

○……中京の攻撃は単調、そこを学芸に読まれてカットから速攻を許し、後半5分10−1と一方的。

後半、窪田を中心にようやく動きが出たが遅きに失した。（松尾）

東女体大（関東）9（5−3 4−3）6 大阪体大

○……東西秋の優勝校同士。事実上のファイナルだ。

先取点は東女が奪ったが15分3−3と互角。展開力に優る東女は18分三沢、21分西峯で5−3としたあと、その好調を後半にもちこみ10分7−3と開いたのが大きい。秀れたキープ力からのゆさぶりに大阪体大ディフェンスが崩されこの差がついた。

大阪体大は得点が散発的。順当な結果といえる。（五島郁太郎）

	【大体】	得	【東女】	得
GK	堀川	0	鍋田	0
GK	梅谷	0	横田	0
FP	奥野	2	赤岸	1
FP	金森	0	高橋	0
FP	平山	1	橋	1
FP	船橋	1	寺田	0
FP	青木	0	田中	0
FP	大谷	0	三沢	2
FP	松本	1	岩永	2
FP	大竹	1	甲斐	0
FP	加藤	0	中田	0
FP	野村	0	西峯	3

（審・近藤・三友）

9（0）PT（0）6

武庫川の反撃とどかず

▽準決勝

日　体 12（8−3 4−8）11 武庫川女

	【日体】	得	【武庫】	得
GK	長谷川	0	田村	0
GK	大森	0	西川	0
FP	小田	2	辻	1
FP	木元	0	三輪	0
FP	寺尾	2	小西	0
FP	林	3	岩井	4
FP	岩本	1	沢田	4
FP	門田	2	藤本	0
FP	水口	1	佐野	2
FP	宮崎	1	福島	0
FP	藤井	0	恒川	0
FP	森	0	谷	0

（審・佐伯・松尾）

11（1）PT（2）12

○……日体はGK長谷川の好パスアウトから前半好調に得点、主導権を握った。

ところが後半5分11−4と開いたあと動きが鈍り、武庫川の岩井沢田らに追いあげられ、21分には11−10と詰められてしまった。

このあと24分小田がゴールして辛くも優位を守り逃げ切れた。

武庫川の粘りで盛りあがり、好試合だった。（山形）

東女体大 14（6−3 8−3）6 東京学芸大

	【学芸】	得	【東女】	得
GK	高橋	0	鍋田	0
GK	渡辺	0	横田	0
FP	永沢	3	三沢	4
FP	斉藤昭	1	田中	0
FP	星野	0	寺田	0
FP	奈倉	0	橋	0
FP	前田	0	高橋	0
FP	山田	1	赤岸	3
FP	斉藤順	0	西峯	2
FP	寺井	0	中田	0
FP	松田	1	甲斐	1
FP	白井	0	岩永	4

（審・清川・山形）

14（2）PT（1）9

○……学芸は山田、永沢の好シュートで巧くスタートしたが、東女は新人・西峯（広島一女商出）がよく動き、15分5−3と主導権を取り戻し、後半は要所で得たPTを決みるとともに三沢、赤岸らで着々加点、20分13−4と大勢を決めた。（伏見）

▽3位決定戦

東京学芸大 11（6−1 5−9）10 武庫川女

○……10−10から学芸は残り25秒永沢が劇的なシュートを決め、3位を確保した。

それにしても武庫川はエンジンのかかりが遅い。前半は一方的に押されながら、前日同よう後半に入って猛反撃。4−8から9−8と逆転する場面もあった。

学芸は追いこされた直後に2得点したのが勝利につながった。

東女体大、前半で決める

▽決勝

東女体大 10（6−0 4−4）4 日　体

	【日体】	得	【東女】	得
GK	長谷川	0	鍋田	0
GK	大森	0	横田	0
FP	小田	0	赤岸	1
FP	木元	0	高橋	3
FP	寺尾	2	橋	1
FP	林	1	寺田	0
FP	岩本	0	田中	0
FP	宮崎	1	三沢	2
FP	水口	0	岩永	1
FP	藤山	0	甲斐	0
FP	藤井	0	中田	0
FP	門田	0	西峯	2

（審・三友・近藤）

10（0）PT（0）4

○……立ちあがりはともに固さがのぞいたが、秋季リーグで連勝した東女はさすがに自信いっぱい。

出足のよいディフェンスで、日体の突入を完ぺきに近く防いでは速い攻撃を仕掛け、13分から20分まで5点をたたみかけ、ペースを握った。

日体は、故障の藤山主将を投入してまで反撃を試み、後半6分宮崎のポストシュート成功から寺尾林で追いあげたが、東女は20分すぎから再び好テンポとなり、三沢赤岸の好判断で、ダメ押しとも云える4点を奪い快勝した。日体の6連覇は成らなかった。（藤田）

本誌は、慣例どおり今年度も1月は休刊とし、次号の発行は51年2月1日の予定ですご了承下さい。（日本協会）

HONDAは無公害時代のパイオニア!!



《世界のホンダ》を支えるホンダイズムとは
フェアプレイを土台にした“先駆者の精神„
です。先人の追従でなく、あくまでも自らの手で
よりよい製品をより早く世に出すこと………それは
究極的にはスポーツ精神と同じ“自分との闘い„です。



本田技研工業㈱鈴鹿製作所
三重県鈴鹿市平田町1907 ☎〈0593〉78-1212 〒513

厚く、深い底刻み、
フット・ワーク優先の
合理シューズ



●力のロス、横スベリを解消した合理設計で定評高い斜線模様の特殊モールド底。（パテント出願中）
●厚く、彫りの深い底、中底はユニークな弾性を誇る二重スポンジ・クッション。
●表布と裏布を離した袋状アッパーで、快適な足沿い、軽快な履き心地。
●ブルー、金茶のカラー・フルなデザイン。
●要部に革補強。



ハンドベアー
デラックス〈HX〉●サイズ=22.5～29●ブルー・金茶●￥2,800
●全国有名スポーツ品店、百貨店でお求め下さい。

神戸 **ベアー株式会社** 東京

関西学生秋季リーグ

大阪体大8シーズン連続

京産大、得失点差で敗る

関西学生秋季リーグ戦は、9月20日から10月19日まで大阪体育大学体育館などで行われた。

1部(7校)は、優勝候補最右翼の大阪体大が、第2日近大戦で不覚をとり、一方、京都産大が各校とせりあいながらも順調に勝ち進み、大阪体大戦(第7日)に宿願の初優勝をかけることになった。

しかし、大阪体大は、さすがに地力のあるところを示し、前半から積極的な攻めこみで、京都産大を崩し8点のリードを奪い制勝、得失点差で京都産大を大きく引きはなして8シーズン連続8度目の優勝を遂げた。両者は49年春にも得失点差で、1、2位の明暗を分けている。

京都産大は4シーズン連続の2位、3位には大阪経大が久々で同志社と並んだ。Bクラスでは、近大が初めて5位に進出、注目された。

2部(7校)は京都教大が安定した攻守で初優勝。

3部(7敗)は追手門学院、天理の優勝争いとなり追手門学院が優勝〜3度目〜、4部(5校)は和歌山大が接戦を切り抜け首位〜2度目〜、5部(4校)は奈良教大が他の3校をおさえ優勝〜2度目〜。

得点王は、1部が矢辺信行(大阪体大4年、武庫高出、39点)、2部が前川和昭(京都教大3年、岸和田高出、34点)、3部が宮崎治郎(追手門学院3年、報徳学園出43点)、4部が桑名幸夫(大阪薬大2年、寝屋川高出、21点)、5部が山田恵敏(奈良教大3年、奈良高出、18点)となった。

3部の宮崎は3シーズン連続、1部の矢辺は2シーズン連続である。

近大、大体大を破る

▽男子1部

大阪体大 20（12−5、8−6）11 甲南
同志社 14（10−6、4−7）13 阪大
京都産大 16（8−9、8−3）12 近大
大阪経大 16（9−1、7−8）9 同志社
京都産大 15（6−9、9−3）12 甲南
近大 18（10−5、8−6）11 大阪体大
大阪体大 34（18−3、16−2）5 阪大
京都産大 14（8−3、6−4）7 大阪経大
同志社 18（12−4、6−2）6 甲南
同志社 16（8−7、8−3）10 近大
京都産大 26（16−8、10−5）13 阪大
大阪体大 14（9−3、5−3）6 大阪経大
近大 20（11−6、9−5）11 阪大
大阪経大 17（9−8、8−3）11 甲南
大阪体大 30（21−3、9−3）6 同志社
京都産大 12（6−7、6−3）10 同志社
大阪経大 20（8−6、12−6）12 近大
阪大 18（12−10、6−7）17 甲南
甲南 14（8−6、6−6）12 近大
阪大 18（8−4、10−10）14 大阪経大
大阪体大 17（7−7、10−2）9 京都産大

【順位】①大阪体大5勝1敗（得失点差71）②京都産大5勝1敗（1）③大阪経大・同志社3勝3敗⑤近大2勝4敗（マイナス4）⑥大阪大2勝4敗（マイナス47）⑦甲南1勝5敗

個人得点10傑

①矢　辺（大体大）39
②木　下（大経大）37
③蒲　池（阪　大）33
④生　駒（京産大）31
⑤丸　井（大体大）27
⑥西　辻（近　大）22
⑦夏　原（近　大）22
⑧石　橋（甲　南）21
⑨長谷川（近　大）18
⑩根　本（大体大）15
⑩古　川（同志社）15
⑩辻　村（甲　南）15

京都教大が初の首位

▽同2部

京都教大 17（12−3、5−5）8 関学
大阪府大 24（10−9、14−9）18 神戸大
関大 22（12−11、10−4）15 大阪教大
関学 20（7−8、13−3）11 京大
大阪教大 16（11−5、5−5）10 京大
京都教大 26（9−3、17−4）7 神戸大
京大 13（7−4、6−5）9 神戸大
関大 16（8−5、8−6）11 関学
京都教大 19（9−8、10−1）9 大阪府大
京大 20（10−9、10−5）14 大阪府大
関学 24（16−3、8−6）9 神戸大
関学 14（7−10、7−3）13 大阪府大
関大 19（8−6、11−2）8 神戸大
京都教大 24（11−6、13−10）16 関大
大阪教大 15（8−3、7−7）10 大阪府大
関大 14（11−2、3−6）8 京大
大阪教大 15（7−7、8−7）14 神戸大
大阪教大 14（9−6、5−6）12 関学
京都教大 23（13−8、10−5）13 京大

関大 18（9―6 9―4）10 大阪府大
京都教大 20（12―8 8―6）14 大阪教大
【順位】①京都教大6戦全勝②関大5勝1敗③大阪教大4勝2敗④関学3勝3敗⑤京大2勝4敗⑥大阪府立大1勝5敗⑦神戸大6敗

追手門学院、天理をかわす

▽同3部
大阪市大 14―8 関西外語大
天理 29―11 大阪工大
追手門学院 21―20 立命館
天理 21―6 関西外語大
桃山学院 25―15 大阪工大
桃山学院 21―8 関西外語大
天理 19―15 大阪市大
追手門学院 22―10 大阪工大
天理 23―21 立命館
立命館 16―13 桃山学院
天理 11（分）11 追手門学院
立命館 15―8 大阪市大
追手門学院 16―14 桃山学院
大阪市大 19―14 大阪工大
桃山学院 19―13 大阪市大
追手門学院 19―1 関大
立命館 18―10 大阪工大
立命館 15―9 関西外語大
大阪工大 16―11 関西外語大
桃山学院 22―13 天理
追手門学院 16―10 大阪市大
【順位】①追手門学院5勝1分②天理4勝1分1敗③桃山学院・立命館4勝2敗⑤大阪市大2勝4敗⑥大阪工大1勝5敗⑦関西外語大6敗

和歌山大と奈良教大

▽同4部
和歌山大 19―5 神戸商船
竜谷 21―11 大阪歯大
大阪薬大 19―11 神戸商般
和歌山大 16―15 大阪歯大
大阪薬大 18―13 大阪歯大
和歌山大 20―18 竜谷
神戸商船 15―11 大阪歯大
大阪薬大 20―15 竜谷
和歌山大 9―8 大阪薬大
神戸商船 15―13 竜谷
【順位】①和歌山大4戦全勝②大阪薬大3勝1敗③神戸商船2勝2敗④竜谷1勝3敗⑤大阪歯大4敗

▽同5部
奈良教大 14―12 京都工繊大
奈良教大 21―19 姫路工大
京都工繊大 13―7 大阪外語大
姫路工大 18（分）18 大阪外語大
奈良教大 17―10 大阪外語大
姫路工大 19―16 京都工繊大
【順位】①奈良教大3戦全勝②姫路工大1勝1分1敗③京都工芸繊維大1勝2敗④大阪外国語大1分2敗

武庫川女3季ぶり

関西学生秋季リーグ戦は9月21日から10月18日まで大阪市中央体育館などで新たに関大が加盟、大阪薬大が2シーズンぶりに復帰、6校によって争われた。

予想どおり武庫川女、大阪体大が順調に勝ち進み、最終戦で顔を合せ、1点を争うすばらしい内容の試合となったが、わずかに攻撃力にまさる武庫川女が大阪体大をかわし、3シーズンぶり3度目の優勝を飾った。個人最高得点選手には29ゴールをマークした佐野かおる選手（武庫川女2年、鈴蘭台高出）が、2シーズン連続で決まった。

大阪教大 6（2―1 4―5）6 成蹊女短大 引き分け
武庫川女 26（16―1 10―1）2 関大
武庫川女 41（25―3 16―0）3 大阪薬大
大阪体大 20（11―2 9―2）4 関大
大阪体大 30（15―2 15―0）2 大阪薬大
関大 9（6―2 3―0）2 大阪薬大
武庫川女 21（13―2 8―3）5 成蹊女短大
大阪体大 25（12―0 13―0）0 大阪教大
成蹊女短大 17（7―3 10―3）6 関大
大阪教大 18（8―1 10―1）2 大阪薬大
武庫川女 15（7―0 8―1）1 大阪教大
大阪体大 15（8―1 7―4）5 成蹊女短大
大阪教大 11（7―4 4―1）5 関大
成蹊女短大 27（16―2 11―0）2 大阪薬大
武庫川女 11（9―7 2―2）9 大阪体大
【順位】①武庫川女5戦全勝②大阪体大4勝1敗③成蹊女短大・大教大2勝1分2敗⑤関大1勝4敗⑥大阪薬大5敗

関大、はね返される

▼男子・各部入れ替え戦（10月26日、大阪市立千鳥体育館）
▽4～5部
竜谷（4部④）19―13 姫路工大（5部②）
大阪歯大（4部⑤）9（分）9 奈良教大（5部①）
▽3～4部
大阪工大（3部⑥）16―14 大阪薬大（4部②）
和歌山大（4部①）14―10 関西外語大（3部⑦）
▽2～3部
天理（3部②）24―19 大阪府大（2部⑥）
追手門学院（3部①）25―11 神戸大（2部⑦）
▽1～2部
大阪大（1部⑥）21（11―7 10―4）11 関大（2部②）
甲南（1部⑦）19（10―7 9―4）11 京都教大（2部①）

国際学生中止に

FISU（国際学生スポーツ連盟）はフランス学生団体が、来年4月に計画していた国際学生ハンドボール・トーナメントをとりあえず中止にすると発表した。
（注）この大会は、今春ルーマニアで開かれた世界学生選手権とはまったく別のもの。

北大、善戦の各校振り切る

北海道学生秋季リーグ戦は第7回北海道知事杯争奪学生選手権を兼ねて、10月24、25、26日の3日間北見工大に、北海道工大を加えた男子7校と女子3校が参加して行われ、男子は北大が9シーズン連続優勝（道知事杯には7連勝）を飾った。

女子は教大旭川が初。

▽男子

北大 28（12－4　16－1）5 北海道工大

北見工大 13（8－8　5－5）13 教大釧路　引き分け

室蘭工大 13（6－4　7－4）8 教大旭川

小樽商大 22（11－8　11－4）12 北海道工大

北大 17（7－8　12－4）12 教大釧路

北見工大 9（5－6　4－3）9 室蘭工大　引き分け

教大旭川 25（18－5　7－5）10 小樽商大

室蘭工大 26（13－3　13－1）4 北海道工大

北大 9（5－2　4－6）8 教大旭川

教大釧路 23（10－9　13－3）12 小樽商大

北見工大 24（12－1　12－4）5 北海道工大

北大 13（6－5　7－3）8 室蘭工大

教大旭川 14（8－6　6－2）8 教大釧路

北見工大 26（13－3　13－5）8 小樽商大

室蘭工大 18（9－4　9－4）8 小樽商大

教大釧路 15（6－2　9－2）4 北海道工大

北見工大 19（10－6　9－6）12 教大旭川

北大 16（6－3　7－2）5 小樽商大

室蘭工大 16（8－7　8－7）14 教大釧路

教大旭川 18（3－3　15－4）7 北海道工大

北大 13（6－2　7－4）6 北見工大

【順位】①北大6戦全勝②室蘭工大4勝1分1敗③北見工大3勝2分1敗④教大旭川3勝3敗⑤教大釧路2勝1分3敗⑥小樽商大1勝5敗⑦北海道工大6敗

▽女子

教大旭川 5（2－2　3－2）4 教大釧路

教大旭川 8（3－0　5－0）0 北見工大

教大釧路 10（6－3　4－0）3 北見工大

【順位】①教大旭川2勝②教大釧路1勝1敗③北見工大2敗

金沢大が初の栄冠

第2回北信越学生選手権は11月8、9の2日間、石川県体育館に3県から7校（1校棄権）が参加して行われ、春秋の北信越学生リーグ（既報）を制した金沢大（石川）が順当勝ち、初優勝を飾った。

▽1回戦（3試合）

金沢大（石川）16（8－8　8－3）11 信州大（長野）

金沢美術工芸大（石川）20（12－4　8－1）5 金沢医大（石川）

福井大（福井）棄権 金沢工大（石川）

▽準決勝

金沢大 21（12－6　9－10）16 福井大

富山大 17（10－2　7－5）7 金沢美術工芸大

▽決勝

金沢大 17（6－12　11－1）13 富山大

中京、男女とも春の雪じょく

東海学生秋季リーグ戦は10月4日から26日までの6日間名古屋の名大球技場などで男子1部6校、2部9校、女子4校が参加して行われ、男子1部は中京が、名城に春の雪じょくを遂げ、2シーズンぶり通算30度目の優勝を飾った。

女子も中京が、春に敗れた中京女を僅差でかわし、2シーズンぶり17度目の優勝。

男子2部は滋賀大が1位（6度目の優勝）となった。

▽男子1部

名城 28（14－5　14－4）9 愛知教大

中京 34（24－0　10－3）3 名工大

名大 17（11－5　6－4）9 岐阜大

中京 39（22－5　17－3）8 愛知教大

名城 25（14－5　11－7）12 岐阜大

名大 18（8－6　10－6）12 名工大

名城 38（25－3　13－4）7 名工大

中京 35（21－3　14－2）5 名大

愛知教大 16（6－8　10－4）12 岐阜大

中京 25（9－5　16－3）8 岐阜大

名城 32（16－4　16－3）7 名大

愛知教大 17（9－6　8－3）9 名工大

岐阜大 24（11－4　13－7）11 名工大

愛知教大 21（13－5　8－8）13 名大

中京 13（7－3　6－5）8 名城

【名城】	得		【中京】	得
杉浦	0	GK	横山	0
木村	0	GK	後藤	0
山本	4	FP	布垣	1
杉山	0	FP	佐藤	4
荒駒	1	FP	岸見	4
高橋	1	FP	三宅	1
鈴木康	1	FP	村上	0
鈴木輝	1	FP	野田	1
岩田	0	FP	西脇	0
西尾	0	FP	小島	0
西浜	0	FP	木村	0
谷元	0	FP	中野	0
	（2）8	PT		13（3）

（審・角　松原）

○……この日まで中京は133得点、名城は123得点。秀れた攻撃力を看

板に実力は互角。

中京は速攻で先行したが、名城も山本のカットインですぐにタイ

そのあとは一進一退となった。

お互いダブルポストを使っての攻防で、決定的な手を打てず、勝負は速攻機をいかにつかむか、あるいはPTとみられた。

後半、中京は速攻がよく出、また速攻くずれからのPTを、10分までに3回つかみ、岸見が決めて10分10―6と優位に立った。

これに対して名城は、前半終了まぎわの2本のPTを落としたのが響き、後半は、散発的に得点しただけで押し切られた。

（松井利幸）

【順位】①中京5戦全勝②名城4勝1敗③愛知教大3勝2敗④名大2勝3敗⑤岐阜大1勝4敗⑥名工大5敗

▽同2部Aブロック

愛大名古屋 15―12 中部工大

愛大名古屋 14―12 南山

南山 15―6 中部工大

▽同Bブロック

静岡大 17―13 名古屋学院

滋賀大 16―8 名古屋学院

滋賀大 24―12 静岡大

▽同Cブロック

愛大豊橋 31―11 愛知学院

三重大 30―8 愛知学院

愛大豊橋 25―10 三重大

▽同7～9位決定リーグ

中部工大 27―7 愛知学院

名古屋学院 8―4 中部工大

名古屋学院 27―13 愛知学院

【順位】⑦名古屋学院⑧中部工大⑨愛知学院

▽同4～6位決定リーグ

南山 24―3 三重大

南山 20―6 静岡大

静岡大 19―8 三重大

【順位】④南山⑤静岡大⑥三重大

▽同1～3位決定リーグ

愛大豊橋 15（9―6, 6―7）13 愛大名古屋

滋賀大 15（10―3, 5―5）8 愛大名古屋

滋賀大 18（11―4, 7―4）8 愛大豊橋

【順位】①滋賀大②愛大豊橋③愛大名古屋

芝浦、東教大ともに残留

▼関東学生秋季リーグ各部入れ替え戦（10月29日、駒沢体育館）

▽4～5部

日本工大（4部⑧）27―15 千葉商大（5部①）

千葉大（4部⑦）21―11 一橋（5部②）

▽3～4部

専修（4部①）12（延）11 東京工大（3部⑧）

武蔵工大（4部②）11―10 関東学院（3部⑦）

▽2～3部

青山学院（3部①）17―10 東海（2部⑧）

防衛大（3部②）20―11 千葉工大（2部⑦）

▽1～2部

東京教大（1部⑧）14（5―3, 9―7）10 日大（2部①）

芝浦工大（1部⑦）17（5―6, 12―4）10 東京学芸大（2部②）

関東学生秋季続報

▽男子・3部 青山学院18―17茨城、防衛大16―9東京工大

【順位】①青山学院7戦全勝②防衛大6勝1敗③立教5勝2敗④茨城大2勝5敗（得失点差0）⑤東大2勝5敗（マイナス9）⑥成蹊2勝5敗（マイナス20）⑦関東学院2勝5敗（マイナス29）⑧東京工大2勝8敗（マイナス44）。得点王＝牧田義巳（防衛大）34。

▽同・4部 武蔵27―14日本工大

【順位】①専修②武蔵工大③横浜商科大④東京経済大＝以上本誌既報⑤武蔵3勝4敗⑥上智2勝1分4敗（得失点差マイナス8）⑦千葉大2勝1分4敗（マイナス35）⑧日本工大1勝6敗。得点王＝兼田佳博（日本工大）48

▽同・5部1～4位決定リーグ（前号訂正分） 都留文化27―11一橋。なお、横浜市大16―15一橋は全文取消し。

早、慶引き分ける

第23回早慶定期戦は10月25日横浜日吉の慶大記念館で行われ、現役戦ははげしい攻防の末、第18回（昭45）以来の引き分けとなった。通算成績は早稲田の14勝2分7敗

▽現役戦

慶応 19（10―9, 9―10）19 早稲田

次回IC、名古屋を候補に

全日本学連は、11月4日福岡で理事会を開き、主として51年度の事業日程につき協議した。

その結果、来秋の第19回（女子第12回）全日本学生選手権の開催地に、名古屋～東海学連～を推したが東西対抗とのからみもあって正式決定にはいたらなかった。

また、日韓交流については、予定どおり来年上半期に韓国の男女代表校を招待、各地で親善試合を行なうと決めた。

「日本リーグ」問題は、日本協会などの姿勢が不鮮明なためか、この日はまったく話し合われなかった。

佐賀国体配分数決まらず

日本協会は、来秋の佐賀国体（注・ハンドボールは神埼町）の種別配分数について検討を進めているが、全国47都道府県協会に意向調査（アンケート）を行っているなどの事情もあって、11月の月例常務理事会でも決定をみず、12月に繰りこされた。

なお、荒川理事長は「縮少にともなって種別を変更することはできない」という日本体協の意向を明きらかにし、一部で成年男子一般に吸収を望まれていた教員も、今秋の三重国体同よう実施が確定した。

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

株式会社　東口電機製作所
社長　東　口　武　雄
奈良市二名町 2603
TEL　0742—44—6161

中川石油株式会社
〒020　盛岡市菜園1丁目7番17号
電話（0196）23—(代)3241

医薬品並に健康関連総合商社
（株）小　田　島
本社　花巻市上町6—5　〒025 TEL01982-3-5162(代)
営業所　花巻，盛岡，水沢，一関，大船渡，釜石，宮古，久慈，青森，八戸，弘前，むつ，仙台，石巻，古川，気仙沼，秋田，大館，横手

うつくしく　うつくしく　よりうつくしく
Wacoal
ワコール

コロナとマークⅡの
岩手トヨペット
本社　盛岡市上田2丁目　TEL(51)3211（代）

株式会社　久保田鉄工
代表者　久保田　広一
八尾市南本町四丁目九番一九号
TEL0729—23—0292

上　田　茂　行

東海溶材株式会社
本　社　清水市北脇242
支　店　浜松市下石田町1743の1
営業所　小山，東京，相模原，三島，富士，三保，焼津，大井川，掛川，豊田，名古屋，四日市，大阪，富山，広島

株式会社　横山商店
横　山　豊
（第3回インターハイ準優勝清水商高主将）
清水市渋川468　TEL0543—45—3482

アサヒスポーツ
福井市松本3丁目4—2
TEL　0776—23—2555

広島県ハンドボール協会長
川　上　病　院
広島市曙町2〜33
TEL0822—61—3782

富士重工指定スバルサービス工場
（有）野田商会
野　田　勉
（第9回インターハイ優勝清水商高選手）
清水市万世町1丁目69　TEL0542—52—6750(代)

学生衣料製造卸
株式会社　島　屋
高岡市問屋町41

北陸電力株式会社
福　井　支　店
福井市日之出1丁目4番1号 〒910
電話（0776）㉓1212番（代表）

屋内外電気工事設計施工
火災報知機設備施工
伊藤電機設備株式会社
代表取締役　伊藤仁和
福井市順化2丁目2番1号 〒910
TEL　営業部(0776)22-7800(代)　工事部21-2266(代)

ヨーロッパの味
タキザワハム
取締役社長　滝沢　武

ブリヂストンタイヤ（株）彦根工場
〒 522-02
滋賀県彦根市高宮町211番地
TEL（07492）2- 8111 代表

不動産の　カントラ　大阪・堺
TEL　0722—33—0003
　　　0722—22—2103
フドウサン

各地の記録

岐阜イーグルスが制す

▼第24回岐阜県総合選手権(10月)

▽男子準々決勝

岐阜イーグルス15―10岐阜教員
長良ブレーブス14―8三　洋
二和家具　23―11　不破ク
伊吹ク　15―11　県岐阜商高

▽同準決勝

岐阜イーグルス　17―11　長良ブレーブス
二和家具　19―11　伊吹ク

▽同3位決定戦

長良ブレーブス17―8伊吹ク

▽同決勝

岐阜イーグルス　15(7―8、8―3)11　二和家具

▽女子準々決勝

三　洋　8(延)7　県岐阜商高
養老女高　7―6　富田女高
岐阜北高　4―3　不破高
リリィズ　14―3　大垣一女高

▽同準決勝

養老女高　9―2　三　洋
リリィズ　2―1　岐阜北高

▽同3位決定戦

岐阜北高　7―6　三　洋

▽同決勝

養老女高　9(8―1、1―1)2　リリィズ

各OBに永久背番号

名大、部史刊行を機に

名古屋大学(東海学連、愛知)はこのほど昭和28年部創設以来の「部史」を発行、それを機にOB会全員に永久背番号を与え、今後のゲームに活かすというユニークな試みを採った。

名前だけのメンバーや、たまにしか顔を出さない人を含めて、この背番号制定でいっそうの親密、結束、交歓が期待されており、来春の愛知クラブリーグには3ケタの背番号も登場しそう。

100万円をかけたという「部史」も創設以来の記録のほか、ハンドボール界への批判・提言・評論のページを設けたのが異彩を放つ。

日本協会機関誌だけでは物足らず、とは手厳しいが、この姿勢は評価されてよい。

改田智洋氏(朝日新聞運動部記者)や、杉山茂氏(前日本協会総務企画担当常務理事)、田中滋章氏(前全日本実連理事長、名大OB)らが痛烈な意見を寄せており日本協会首脳も目を通して欲しいもの。

同誌編集者は、各チームの部報などに、このような場を希みたいというが確かに一つの方向だ。

このほか、韓国協会・洪淳泰氏台湾協会・宋丙堂氏らの寄稿もあり、バラエティに富んだ内容となっている。

男子は柏崎勢で決勝

▼新潟県高校大会(11月、巻高)

▽男子1回戦(1試合)

巻　6―4　中　越

▽同準決勝

柏　崎　10―5　新潟明訓
柏崎工　17―7　巻

▽同決勝

柏崎工　14(5―4、9―3)7　柏　崎

▽女子決勝リーグ

新潟江南　10―1　巻
巻　6―1　新潟明訓
新潟江南　15―2　新潟明訓

【順位】①新潟江南②巻③新潟明訓

1部は海自下総が順当

▼「若潮国体」記念杯千葉県実業団秋季定期戦(11月、市原市三井石油化学体育館)=男子のみ

▽1部

三井石油化学24―13　海自21空群
海自下総　不戦勝　陸自下志津
海自木更津22―15　海自21空群
三井石油化学　不戦勝　陸下志津
海自下総　30―12　海自木更津
海自21空群　不戦勝　陸自下志津
三井石油化学22―11　海自木更津
海自下総　35―13　海自21空群
海自木更津　不戦勝　陸自下志津
海自下総　25―6　三井石油化学

【順位】①海自下総4戦全勝②三井石油化学3勝1敗③海自木更津航空補給所2勝2敗④海自21航空群1勝3敗⑤陸自下志津4敗(棄権)

【2部順位】①丸善石油4戦全勝②日産石油化学3勝1敗③陸自第1ヘリコプター団2勝2敗④陸自第1空挺団⑤住友千葉化学

【3部順位】①出光興産千葉4戦全勝②ヤトロン3勝1敗③東洋サッシ工業2勝2敗④陸自松戸⑤空自嶺岡山

第7師団が圧倒勝ち

▼第1回全道自衛隊選手権(11月、札幌・真駒内駐屯地体育館)

▽リーグ戦

第7師団　51(26―1、25―2)3　第3教連
札幌駐屯　23(11―6、12―7)13　丘珠自衛隊
第7師団　35(14―2、21―6)8　丘珠自衛隊
札幌駐屯　25(13―9、12―5)14　第3教連
第7師団　28(15―6、13―2)8　札幌駐屯地
第3教連　20(11―6、9―9)15　丘珠自衛隊

【順位】①第7師団3戦全勝②札幌駐屯地2勝1敗③第3教連1勝2敗④丘珠自衛隊3敗

佐賀東、女子の1位に

▼佐賀県高校新人大会(11月、神埼農高)

▽男子1回戦(3試合)

佐賀農　17―5　佐賀商
佐賀西　17―10　鹿島実業
神埼農　19―9　神　埼

▽同準決勝

佐賀農　9―8　佐賀東
神埼農　13―7　佐賀西

▽同3位決定戦

佐賀東　18―8　佐賀西

▽同決勝

神埼農　12(7―3、5―7)10　佐賀農

▽女子決勝リーグ

神埼農　12―3　嬉野商
佐賀東　5―4　佐賀女
佐賀東　5―1　嬉野商
佐賀女　6―4　神埼農
佐賀女　12―1　嬉野商
佐賀東　5(分)5　神埼農

【順位】①佐賀東2勝1分②佐賀女2勝1敗③神埼農1勝1分1敗④嬉野商3敗

金沢市役所が7連覇

▼第12回石川県実業団選手権(11月、石川県体育館)

▽1回戦(1試合)

小松製作所15―3　石川教員

▽準決勝

金沢市役所　　小松製作所
金沢市役所B24―10　津田駒工業

▽決勝

金沢市役所　18(9―6、9―11)17　金沢市役所B

▼第7回石川県クラブ選手権(11月、石川県体育館)=男子のみ

▽1回戦(準決勝)

あすなろク12―10　県工ク
小松ク　16―10　七尾ク

▽決勝

あすなろク　15(6―5、9―3)8　小松ク

男子で弘前南勝つ

▼第25回青森県高校秋季選手権（10月野辺地高）

▽男子準々決勝
弘前南 14―8 七戸
野辺地 17―16 青森東
青森南 11―9 十和工
三本木 15―12 青森

▽同準決勝
弘前南 12―7 野辺地
三本木 12―6 青森南

▽同決勝
弘前南 10（8―3 2―4）7 三本木

▽女子1回戦（2試合）
野辺地 19―2 柏木農
七戸 15―3 青森南

▽同準決勝
青森西 12―4 野辺地
七戸 6―1 三本木

▽同決勝
青森西 12（9―3 3―0）3 七戸

花巻北と盛岡二が優勝

▼第19回岩手県高校新人大会（10月、花巻市民体育館）

▽男子準々決勝
盛岡四 10―7 盛岡三
水沢 14（延）12 岩手
花巻北 9―7 盛岡一
久慈 18―9 釜石南

▽同準決勝
盛岡四 16―8 水沢
花巻北 12―6 久慈

▽同決勝
花巻北 12（5―3 7―6）9 盛岡四

▽女子準々決勝
盛岡二 8―2 水沢
花巻北 6―4 平舘
釜石南 5―4 大原商
花巻南 16―3 岩手女

▽同準決勝
盛岡二 5―1 花巻北
花巻南 12―1 釜石南

▽同決勝
盛岡二 9（4―0 5―2）2 花巻南

▼第12回沖縄県高校選手権（10月浦添高）

▽男子準々決勝
興南 17―4 那覇
沖縄工 27―7 北山
首里 17―14 中部工
浦添 21―7 小禄

▽同準決勝
浦添 13―8 首里
沖縄工 19―11 興南

▽同決勝
沖縄工 23（12―7 11―4）11 浦添

▽女子準々決勝
興南 6（延）5 浦添
コザ 7―4 中部商
首里 11―3 糸満
前原 10―7 宜野座

▽同準決勝
興南 6―5 コザ
首里 14―7 前原

▽同決勝
興南 9（3―1 6―2）3 首里

国体に実業団まだ必要

三重国体の最後の2日間をみて、一つの感想をもった。

それは、有力実業団の国体辞退が取り沙汰されているが、まったくナンセンスな議論だということだ。

私は、成年部門を選んでみていたわけだが、女子決勝の田村紡―ブラザー、男子の実業団同士による準決勝以降各試合は、まったく力のこもった内容で、国体を機に、初めてハンドボールを観戦した人も、充分醍醐味にひたれたと思う。

一流チームの技と力があってこそ、ハンドボールの普及が企れるこれは好例だ。

クラブの情熱家たちの努力にも敬意を払うが、地元の人に感銘を与えたり、新しいファンを獲得する内容は期待できまい。

一流チームがこぞって参加しハンドボールの種蒔きをする絶好機と、国体を位置づけるのもまだまだ間違ってはいない。

投書欄　明日への提言

有力チームを欠いた国体は、ハンドボールのイメージダウンにつながる危惧さえあろう。

【静岡、T・T】

〝役員不在〟の閉会式

関東学生秋季リーグは10月19日中大の優勝で終了したが、その閉会式をみて、驚きかつ落胆した。

年度のしめくくりである筈なのに、OBによる役員諸氏の姿が見えず、寒々とした表彰であり閉会であった。なぜ、役員諸氏は出席しないのだろうか。あれでは、一生懸命にプレーした選手が可愛想だし、一人のOBとして、なんとも淋しく思います。

役員諸氏よ。公式戦であるリーグ戦をどんなに考えておられるのか。

このように役員の態度が冷淡では、ハンドボールの人気はいつまでも盛りあがるまい。私は悲しく思います。【東京中野区内・K生＝OB】

北海道自衛隊連が発足

かねてから準備の進められていた北海道自衛隊連盟が正式発足。▽会長　油井碩也（札幌）▽理事長　宮野憲夫（札幌）▽理事　中嶋忠幸（丘珠）、野田健次（真駒内）、北岡良友（東千歳）、高倉文敏（札幌）、平川哲人（真駒内）

編集後記

◇……最近、寄せられる原稿に「××協会報道部」とか「記録部」といったクレジットが目立つようになりました。

地方組織が、こうした活動に積極的かつ具体的に取り組まれはじめたことを示すもので、大いに歓迎される傾向です。

◇……マスコミ対策は、斯界の重要課題であり、新発足を予想される「日本リーグ」の成否もこの面に一つのカギが握られています。

各地協会の報道担当者、記録担当者の〝全国集会〟も試みられてよい時期です。

◇……普及指導部が、意欲的な普及プランを打ち出しました（3頁）。

学窓を卒えたあとや、第一線を退いたあとも、ハンドボールをつづけたい、とする人の数は相当なもの。

〝市民活動〟の組織化に期待するところ大です。

◇……世界女子の結果が気になります。

男子のオリンピック予選の行く方も気にかかります。

印刷の前日あたりから公共企業のストが取り沙汰され、本誌の郵送に影響しそうなもの、気がかりです。（S・S）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』 第一三七号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 昭[illegible]五〇年一一月二十五日印刷 昭和五〇年一二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会 東京都[illegible]神南一-一-一 電話 [illegible](467)三一一一 振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
定価二百五十円（年間購読料二千五百円）